

月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.61

アドルとともに冒険をする仲間たちが続々登場！

イースⅧ -Lacrimosa of DANA- 最新情報!!

単行本第2巻は3月10日発売！

英雄伝説 閃の軌跡

エステル&ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオの舞台裏

ファルコムヒロインが好き!

杜宮市から続々転入中!?

みんな集まれ! ファルコム学園

ファルコムニュース

ドラマCD『イース & 空の軌跡 vs.ヴァン・ジョー』シナリオ掲載



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

イースⅧ最新情報が到着！アドルと冒険を共にする仲間の詳細が明らかに！

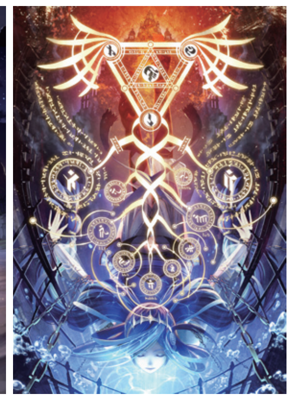
赤毛の剣士アドル=クリスティンの冒険譚を綴るアクションRPG『イース』シリーズ最新作『イースⅧ』。完全新作となる今回は、ストーリーはもちろんのこと、キャラクターも謎に包まれていたが、今回は、アドルの仲間に関する情報の第一弾がついに到着した！　また、『イース』の醍醐味である、戦闘システムについての情報もあるので、そちらも見ていこう。

●製品情報
- ●タイトル　：イースⅧ -Lacrimosa of DANA-
- ●発売日　：2016年夏予定
- ●ジャンル　：アクションRPG
- ●対応機種　：PlayStation®4、PlayStation® Vita対応
- ●プレイ人数：1人
- ●CEROレーティング：審査予定









ラクシャ

ロンバルディア号に乗船していたガルマン貴族ロズウェル家の令嬢。19歳。貴族として常に礼儀正しく振る舞おうとしているが、気位の高さや頑固な性格が災いして空回ってしまうことも。雑多な身分や職業の者たちが集まる漂流村での環境に戸惑いつつも、古代生物や動植物に関する豊富な知識を活かし、アドルたちと行動を共にすることになる。

使用武器：レイピア（射撃）

細身のレイピアで前方の敵に高速で突きを繰り出す。アドル、ラクシャ、サハドの中でもっともスピードがあり、リーチもかなりあるものの、攻撃エリアが前方に集中してしまうため、死角からの攻撃には弱く、敵に囲まれるとピンチに陥りやすい。





“冒険家”ですって…？
そんなふざけた肩書き、
断じて認めるわけにはいきません！







ダーナ

アドルの夢の中に登場する神秘的な蒼髪の少女。可憐な見た目とは裏腹に、想像力豊かで大胆な行動に出る事も多く、周囲の人々を驚かせることもある。エレシア大陸では見られない、非常に高度な文明を持った地域で生きているらしく、アドルは夢を通じてその少女の生き様を追体験するようになるのだが……。

使用武器:半月刀（斬撃）

刀身が大きく湾曲した二振りの半月刀を用い、身体の捻りを活かして素早い斬撃を次々と繰り出していく。身軽でスピードがある上、回転力から生み出されるその斬撃はアドルの攻撃力をも上回るほどの威力を持つ。

『イースⅧ』のもう一人の主人公!? 謎に包まれた少女の正体は……？

『イース』といえば、アドルが主人公の人気シリーズだが、今作ではなんと、もう一人主人公がいるという情報が到着した！　それが、イメージイラストにも登場していた蒼髪の少女・ダーナだ。彼女はアドルがセイレン島で漂流生活を送る一方で、アドルの夢の中の世界で主人公として、操作できるということだ。二人の主人公の物語を通して、今作の謎も徐々に明かされていくとのことなので、今後の情報に期待したい。

燃えるような
真っ赤な髪……
あの人は誰
だったんだろう……









サハド

豪快闊達で陽気なグリーク地方出身の漁師。41歳。がさつであけっぴろげな言動で貴族出身のラクシャを呆れさせることもあるが、人情家で涙もろいところがあり、どこか憎めない人柄の海の男。海に関する知識は豊富で、漁師ならではの独自の哲学も持つ。故郷に家族がいるらしく、《セイレン島》から脱出するためアドルたちと協力することになる。

使用武器：錨（打撃）

巨大な錨を振り回して周囲の敵を攻撃する。一振りのモーションが大きくスキを作りやすいが反面、攻撃力が高く周囲の敵も巻き込んでダメージを与えることができる。

ガハハ、
おかげさまで
助かった。
お二人さん、
愛してるぜ！







これぞ『イース』の醍醐味！　バトルシステムをチェック!!

スキル攻撃

SP（スキルポイント）を消費することで各キャラ固有の攻撃を行うことができる、いわゆる必殺技。スキル攻撃はRボタン+○×△□のいずれかを押すことで発動することができ、各スキルはメニュー画面でどのボタンで発動させるかをセットすることも可能だ。

アドル
≪フォースエッジ≫

刀身にオーラを発生させ、周囲の敵をまとめて薙ぎ払うアドル専用のスキル攻撃。発動までのスキが少なく、攻撃範囲もかなり広い。

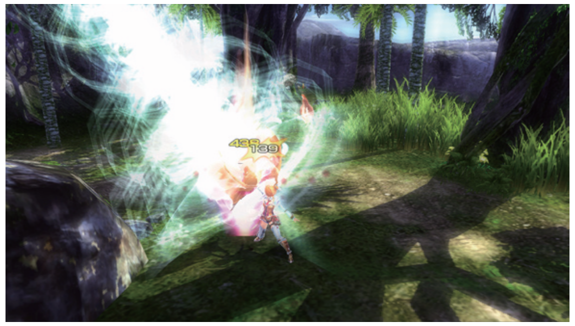




ラクシャ
≪シルフィードキス≫

上空に向けてレイピアの切っ先から収束された竜巻を発生させる技。特に飛行タイプの敵に対して効果が高い。





サハド
≪地引き網≫

前方のエリア目掛けて漁で使用する網を投げ、地引き網の要領で絡め取ったすべての敵にダメージを与える。





ダーナ
≪アイスエイジ≫

上空に飛び上がり、圧縮した冷気を地上目掛けて一気に叩きつける。広範囲の敵に大ダメージを与えるダーナの強力なスキル攻撃。





フラッシュガード

敵の攻撃が当たるという際にスキルボタンをタイミングよく押すことで発動する特殊なガードテクニック。これが発動するとキャラクターが白く発光し、あらゆる攻撃を無効化することが可能になるぞ。更に、このガードが発動した後は一定時間攻撃がすべてクリティカル攻撃になるので、より多くのダメージを敵に与えることができるのだ。







フラッシュムーブ





敵の攻撃が当たる直前に回避アクションを行うことで発動する退避テクニック。フラッシュムーブが発動すると一定時間プレイヤー以外の敵の動きがスローモーションになるので、それを利用してこちらの有利な位置へと移動したり、敵の強力な攻撃から安全な位置へと移動したりとすることができるぞ。

攻撃属性

前作『セルセタの樹海』にもあった攻撃属性は、今作にも引き続き継承。キャラクターの武器により、「斬」、「打」、「射」の3つの攻撃タイプがあり、これを敵の特性によりキャラクターをチェンジすることで切り替えていくことで、より効率良く戦闘を行うことができるのだ。

【打撃】 衝撃を与えて攻撃するタイプ。硬い甲羅のような装甲を持つ敵に直接打撃を加えることで大ダメージを与えることが可能



【斬撃】 刃物で敵を斬りつけるタイプ。軟らかい体をした衝撃を吸収する性質の敵に対して絶大な威力を発揮する



【射撃】 リーチの長い中～遠距離攻撃を行うタイプ。斬撃、打撃に比べ威力は劣るものの、飛行型などの身軽な敵に対して確実に狙いを定めることが可能



ブレイク

弱点属性で攻撃をして、一定のダメージを与えることにより、敵を「ブレイク」状態にすることが可能に。ブレイク状態となった敵は、弱点属性ではない攻撃でも大ダメージを与えることができるようになるぞ。また、「ブレイク」状態にすることにより、敵がレアアイテムを落としたり、飛行状態の敵が飛行不能状態になるので、積極的に狙っていこう。



使用武器：剣（斬撃）

片手剣によるオーソドックスな戦闘スタイル。突出した要素は無いものの、威力・スピード・攻撃範囲はいずれも標準以上で扱いやすく、様々な状況に対応することができる。

アドル＝クリスティン

燃えるような赤毛と、少年のように澄んだ黒い瞳をもつ21歳の青年。16歳で故郷エウロペ地方の名も無き山村を飛び出し、古代王国《イース》、秘境《セルセタの樹海》など幾多の冒険に挑み、若いながらも「冒険家」としてその名が知られつつある。
旅客船ロンバルディア号に乗船していたがゲーテ海航行中、謎の巨大海洋生物に襲われ乗船客とともに行方不明となってしまう。



《ARCUS》の誤作動で
リィンとアリサが入れ替わっちゃった⁉
英雄伝説
閃の軌跡
メンタルクロスリンク
ある日の模擬戦のこと、《ARCUS》の新機能のテストを兼ねて模擬戦を行っていたリィン一同。戦いが白熱していく最中、渾身の一撃を今まさに撃ち込もうとしたその時、リィンとアリサ、そしてラウラとフィーの精神がそれぞれ入れ替わってしまい……!?
『英雄伝説 閃の軌跡』初のノベライズはまさかのドタバタコメディー。彼らを待ち受けている結末とは……!?
好評発売中!
1,200円（税抜）
原作：日本ファルコム（『英雄伝説 閃の軌跡』）
著：草薙アキ
イラスト：YahaKo
■判型：B6正寸　総ページ数：256P　ISBN：978-4-8021-3015-8
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.　©AKI KUSANAGI , YAHAKO 2015



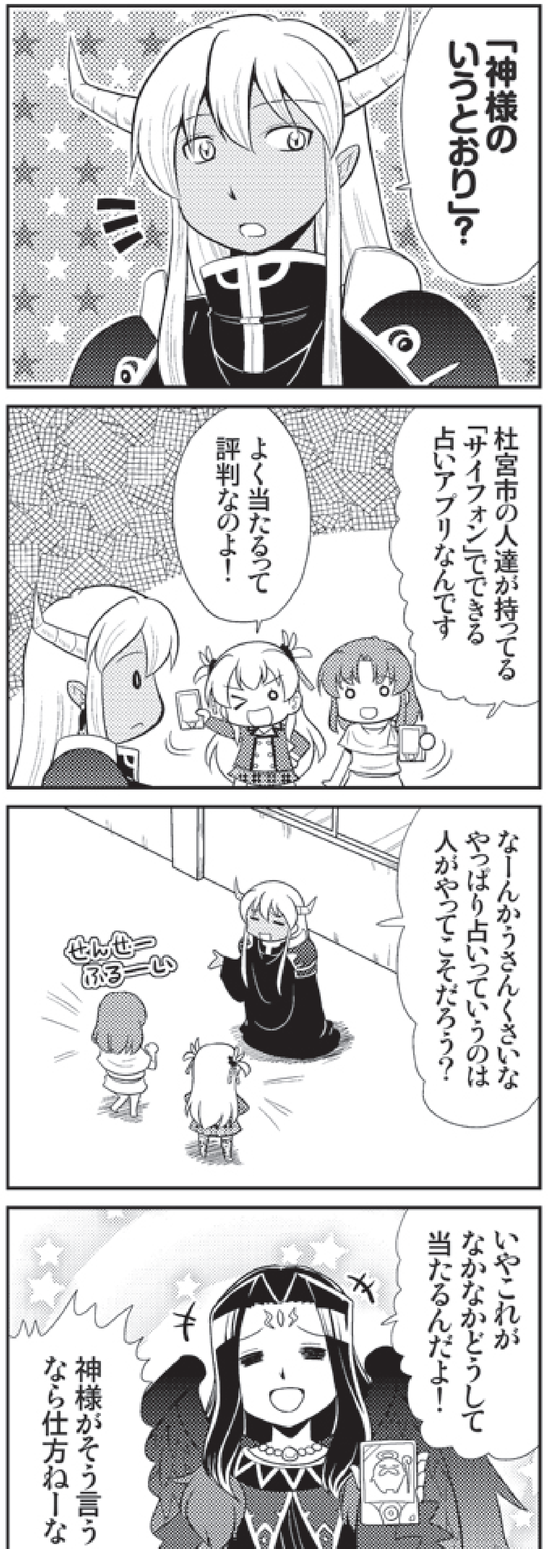
FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
ふぁるこむコミックざんまい
価格：本体920円＋税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



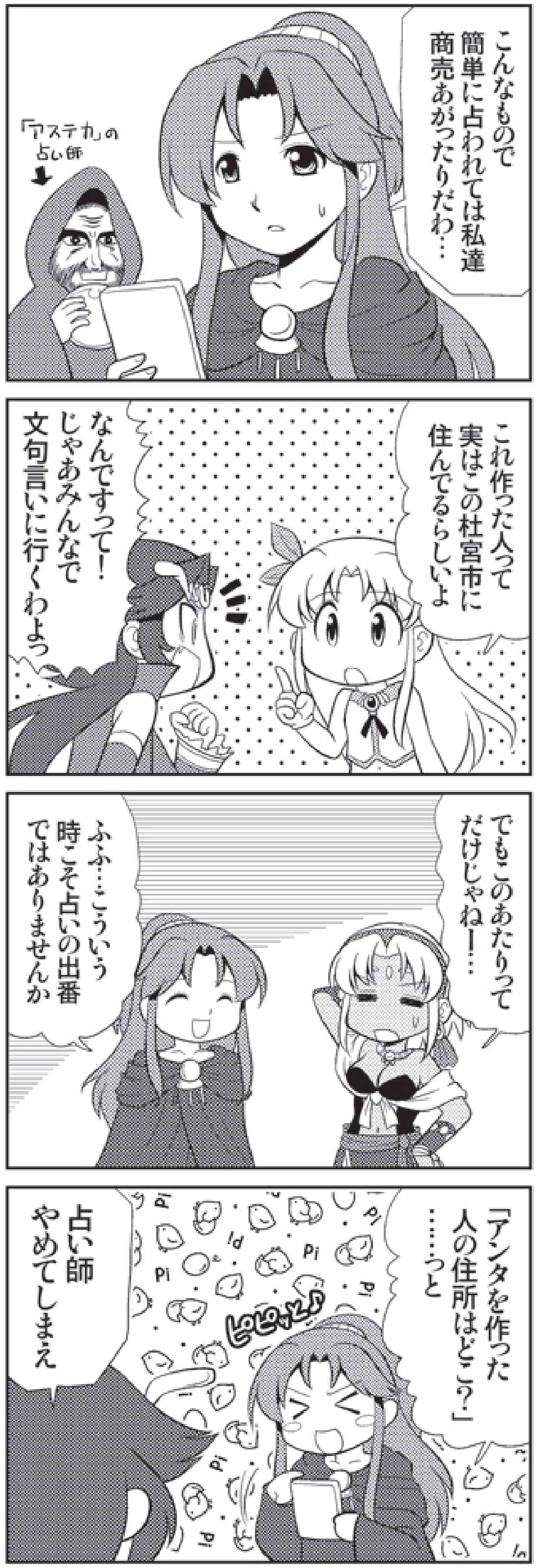
みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

神様アプリ



危惧する占い師



四宮祐騎



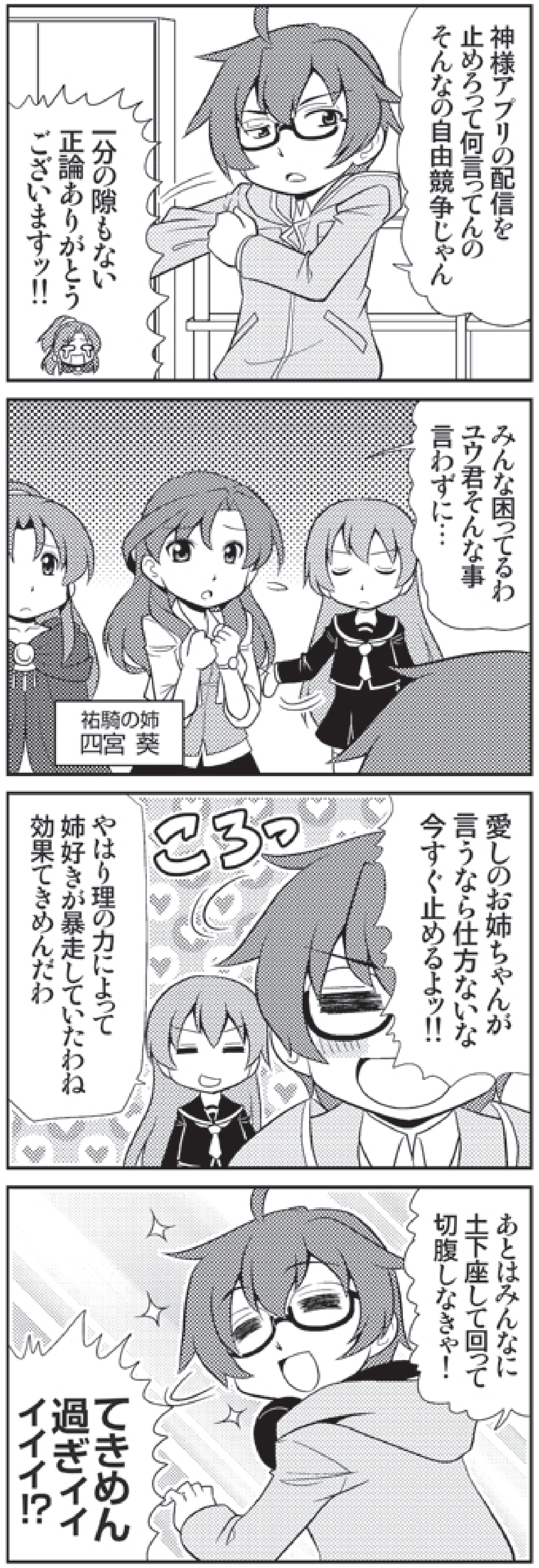
殴りたいその顔



コンボとは



効果てきめん



ランクダウン



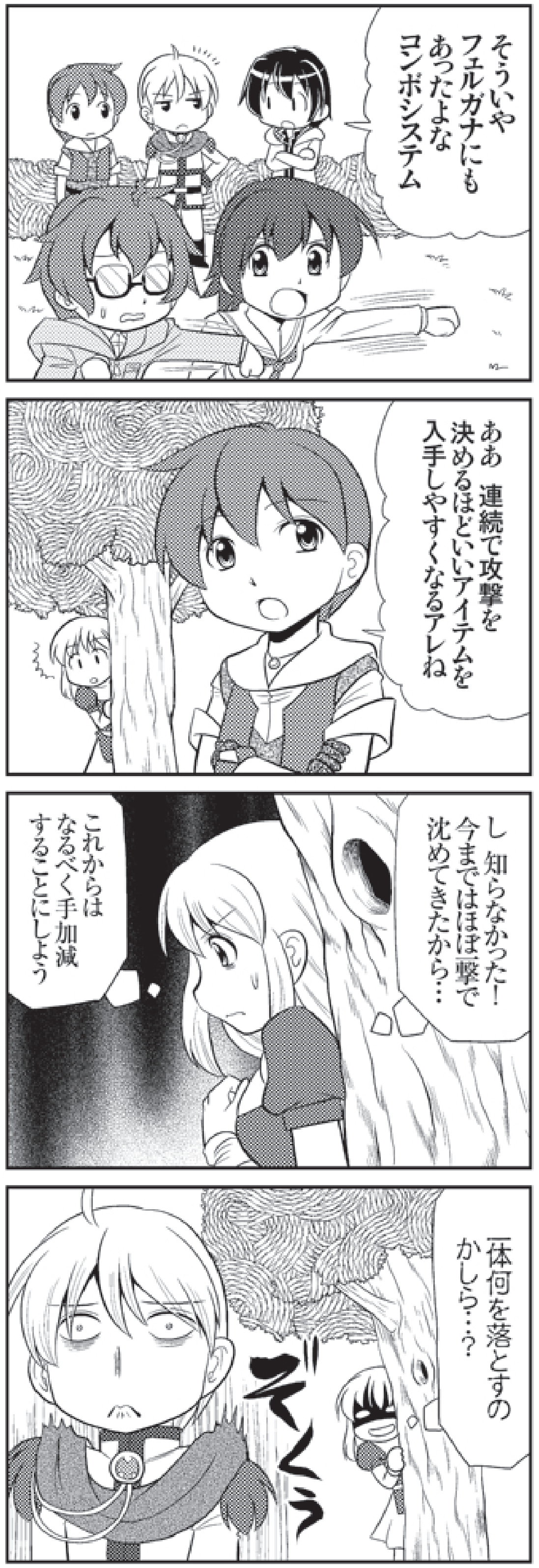
コンボの専門家



割りきった男



コンボが増えるがな



上下関係



ユウキのコンボ



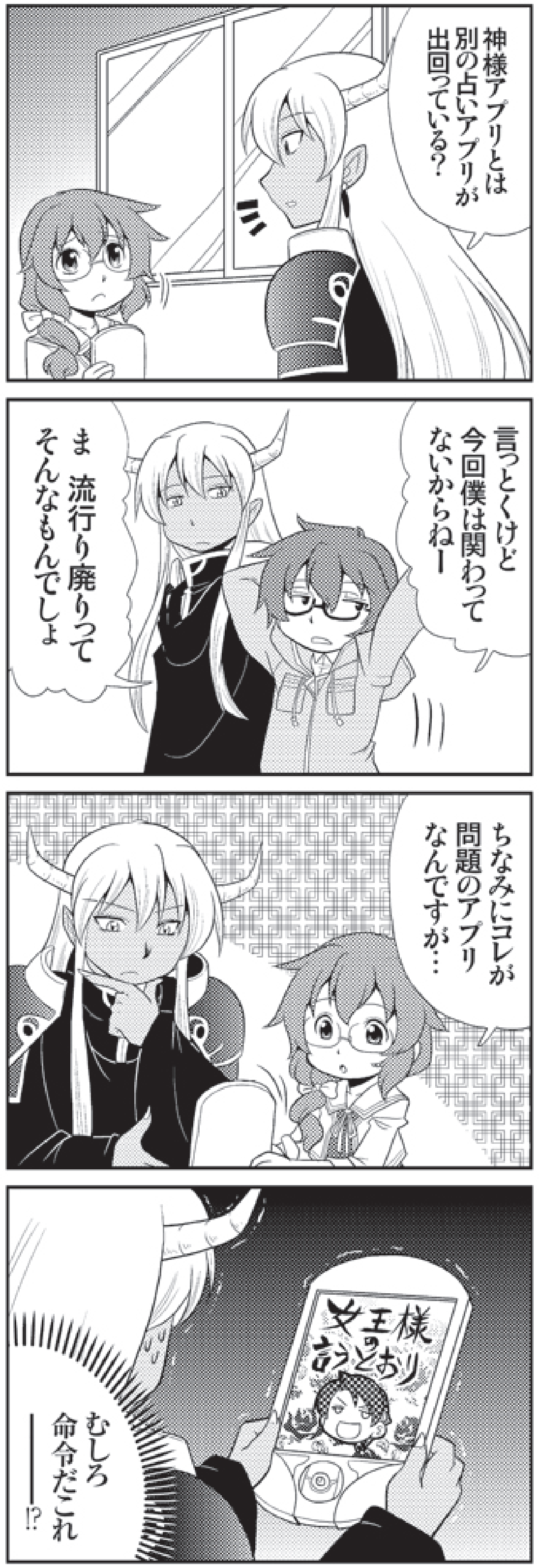
豪快なアレ



パソコンあるあるレベル2

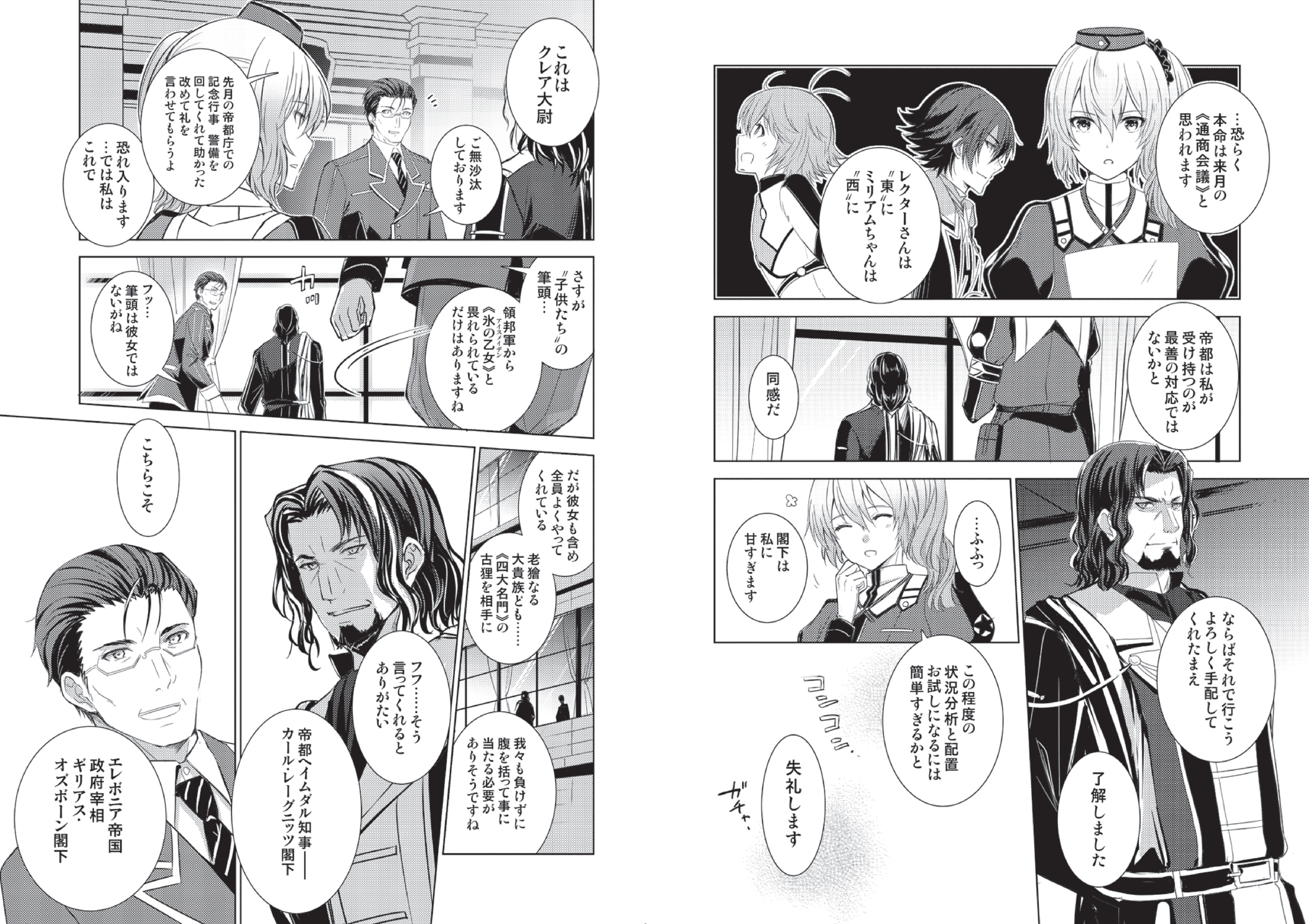


新たな火種



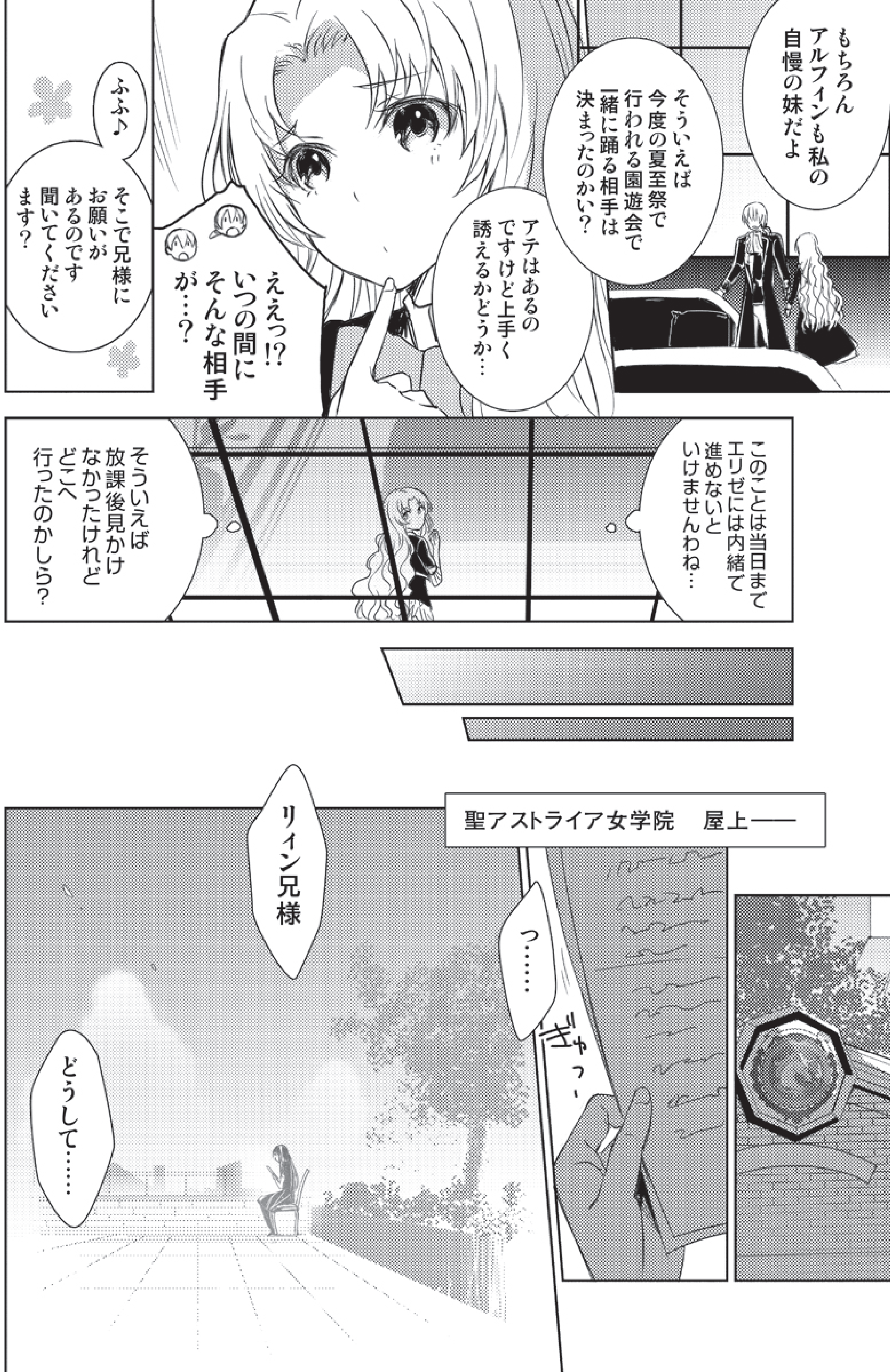

帝都ヘイムダル　皇城 バルフレイム宮
THE LEGEND OF HEROES
閃の軌跡
第17話
原作：日本ファルコム（『英雄伝説 閃の軌跡』）
脚本：恵村まお
漫画：さがら梨々
帝都政府 宰相執務室
共和国政府との交渉は完了
ノルド高原における戦闘状況は完全に回避されたとのことです
ですが実行犯はともかく〝彼ら〟のひとりは取り逃したままです
フフ ここまでの仕掛けをされては我々も慎重にならざるをえまい
まずは帝都の《夏至祭》…〝子供たち〟をどう動かすべきかな？


理想の学園生活がここにある!?
まさかのTVアニメ化も二度成し遂げた、日本ファルコムオールスターギャグ四コマ第4巻、好評発売中です！　新たなキャラクターも続々と登場し、ゴーファイ！の波はまだまだ止まらない!?
FB ファルコムBOOKS
既刊もよろしく!!
ファルコム学園 01 新久保だいすけ
ファルコム学園 02 新久保だいすけ
ファルコム学園 03 新久保だいすけ
最新作『東京ザナドゥ』キャラが早くも殴りこみ！
みんな集まれ！
ファルコム学園④
著者：新久保だいすけ
本体：850円＋（税）
ISBN:978-4-8021-3013-4
好評発売中!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


…恐らく本命は来月の《通商会議》と思われます
レクターさんは〝東〟にミリアムちゃんは〝西〟に
帝都は私が受け持つのが最善の対応ではないかと
同感だ
…ふふっ
閣下は私に甘すぎます
ならばそれで行こうよろしく手配してくれたまえ
この程度の状況分析と配置お試しになるには簡単すぎるかと
了解しました
コンコン
失礼します
ガチャ
これはクレア大尉
ご無沙汰しております
先月の帝都庁での記念行事 警備を回してくれて助かった改めて礼を言わせてもらうよ
恐れ入ります…では私はこれで
さすが〝子供たち〟の筆頭…
領邦軍から《氷の乙女（アイスメイデン）》と畏れられているだけはありますね
カツ
フッ…筆頭は彼女ではないがね
だが彼女も含め全員よくやってくれている
老獪なる大貴族ども……《四大名門》の古狸を相手に
我々も負けずに腹を括って事に当たる必要がありそうですね
フフ……そう言ってくれるとありがたい
帝都ヘイムダル知事――カール・レーグニッツ閣下
こちらこそ
エレボニア帝国政府宰相ギリアス・オズボーン閣下



同バルフレイム宮 皇族専用テラス
なるほど… だから兄上が 通商会議に参加 されるんですね
ああ 来月 クロスベルで開かれる 西ゼムリアにおける 初の国際会議と 言ってもいい
エレボニア帝国第一皇子 オリヴァルト・ライゼ・アルノール
《西ゼムリア 通商会議》…
カルバード 共和国からは ロックスミス 大統領
レミフェリア 公国からは 国家元首である アルバート大公
リベール王国 からは 女王代理の クローディア王太女
主催地 クロスベル自治洲 からは クロイス市長と マクダエル議長
いずれも 各国のトップか それに準じる人間が 参加する予定さ
エレボニアからは 帝国政府代表の オズボーン宰相…
本来なら 国家元首の父上が 参列する場なので 皇族である兄上が 同行するわけ ですね！
面目ないです 兄上に教えて いただくまで そんな事情も 判らないなんて
…兄上に 比べたらまるで 勉強不足で 力も機転も全然 足りなくて…
こんな僕が いずれ父上の 跡を継いでも いいのか…
…フフ
同じようなことを リベールの クローディア殿下も 仰っていたよ
え……
彼女も王太女という 次期女王の立場を 継ぐにあたり相当迷い 悩まれたそうだ
しかし己の力不足を 受け止めた上で それでも前に進む 決断をなさった
我が弟にも それと同じ事が できないとは決して 思わない
兄上…
ゴ
あらぁ～？
兄様は セドリックを ずいぶんと 買われてらっしゃる のね～？
あ…アルフィン！

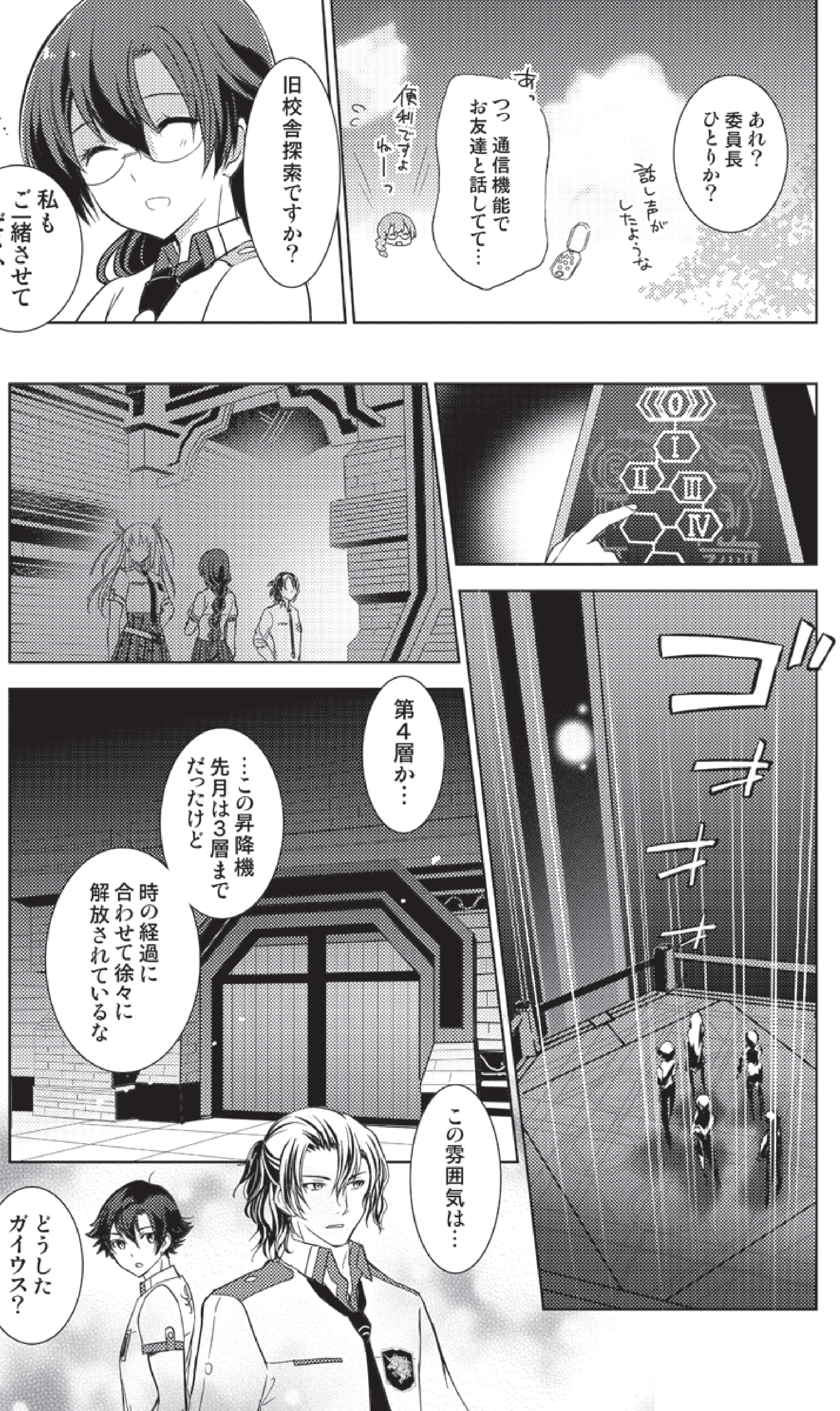

もちろん アルフィンも私の 自慢の妹だよ
そういえば 今度の夏至祭で 行われる園遊会で 一緒に踊る相手は 決まったのかい？
アテはあるの ですけど上手く 誘えるかどうか…
ええっ!? いつの間に そんな相手 が…？
ふふ♪
そこで兄様に お願いが あるのです 聞いてください ます？
このことは当日まで エリゼには内緒で 進めないと いけませんわね…
そういえば 放課後見かけ なかったけれど どこへ 行ったのかしら？
聖アストライア女学院　屋上――
リィン兄様
っ……
ぎゅっ
どうして……


――7月中旬
トリスタの街は 初夏を迎え 士官学院では 学生服が夏服へと 切り替わり…
水練の授業も 始まっていた
ピッ
ざばっ
ばしゃ ばしゃ
ザパッ
ぷあっ
ラウラ…貴女 ちょっと速すぎ じゃない？
まぁ… 水泳部員だしな これくらいは
アリサさんも 良いタイム ですよ


むぅ…
今月から水練授業も加わって大変だけど
このハードスケジュールにも少し慣れてきた感じだな
エマはエマで羨ましいところがあるし…
来週水曜が実力テストその週末が特別実習だっけ
くっ
同タイムとは君とはつくづく張り合う運命らしいな…!?
俺は別に張り合ってるつもりはないが
ってことは帝都の夏至祭の時期かぁ…
うーん行きたかったな…
エリオット？
おやリィン
そのアザは…何かケガでもしたのか？
あれ？ほんとだうっすらだけど
…ああこれは昔からあるアザさ
ずいぶん前のものみたいでいつできたか覚えてないんだ
そうなんだ…よく見たら細かい傷跡もいっぱいあるし…
いいなぁ引き締まってるし男の身体って感じがするよ
貴方は変に鍛えない方がいいと思うわよ…
むきーん♪
確かにあまり見たくない気が…
ザバッ
フィー
このタイム…そなたの本気ではないだろう
……なんで決め付けるの？
見くびらないでもらおう力の使い方を見ればわかる
…なぜだ？
ザバ
別に…めんどくさいだけ
……
ペタ
やはり我らは〝合わない〟ようだな…
ペタ

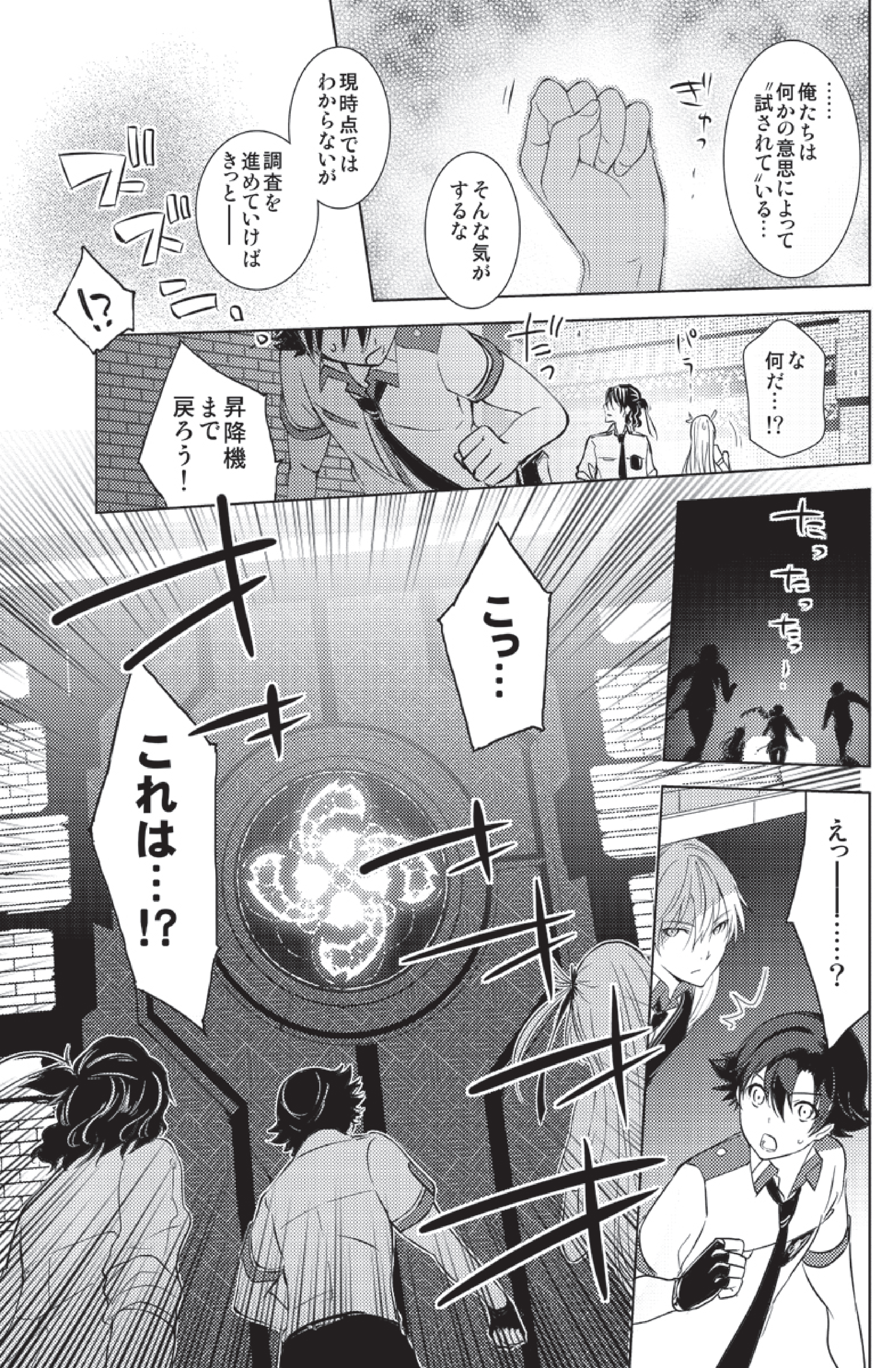


リィン…なんとかできないの？
ななんで俺が!?
明日の旧校舎調査ふたりを誘うか…？
いや…一緒は難しいだろうな…
翌日　旧校舎前——
…わからない
ノルドの地では〝資質〟を見せることはなかったけど…
ああもうアタシもついていけばよかったわ
どう考えても〝鍵〟として機能してる可能性が高いし
でも…
ピクッ
ザザッ
セリーヌ？
へぇあの猫セリーヌって言うんだ
あっ…！リィンさん…



あれ？委員長ひとりか？
話し声がしたような
あっ つっ通信機能でお友達と話してて…
便利ですよねーっ
旧校舎探索ですか？
にこ…
私もご一緒させてください
0
I
II
III
IV
ゴォォォ
第4層か…
…この昇降機先月は3層までだったけど
時の経過に合わせて徐々に解放されているな
この雰囲気は…
どうしたガイウス？


ノルドで…
石切場で感じたのと
同じような気配だな
ええ
もしかすると
"上位属性"が
働いてるのかも
しれません
上位属性…
よし
油断しないよう
探索を進めよう
……!
ふぅ…
最奥はここ
みたいですね
時と共に
1層ずつ
解放される
0
I
II
III
IV
そして
下に行くほど
魔獣も強く
なっていく…
やはりこの
旧校舎には
こういった
"法則性"が
あるみたい
だな
でも4月までは
こんな事はなかったって
学院長も仰ってたわ
なぜなのかしら…


……
俺たちは
何かの意思によって
"試されて"いる…
ぎゅっ…
そんな気が
するな
現時点では
わからないが
調査を
進めていけば
きっと──
!?
な
何だ…!?
昇降機
まで
戻ろう!
たったったっ
こっ…
これは…!?
えっ───!……?


赤い……
扉…？
カチカチカチカチ
こんなもの
さっきは
無かったぞ…
ど どうやって
開くのかしら？
鍵穴っぽいものも
見当たらないわ
それに
この歯車や
ゼンマイのような
音は一体……
突然
現れたって
ことか…
一体
どうして…
もしかして
この先に
旧校舎の鍵を解く
重要な手がかりが
眠ってるかも
しれないな…
ス。


っ……!?
ぐっ
……む
胸のアザが
……
…… ……… …示セ… ……… …
…？
どうした？
いや…
なんでもない…
ばっ
カチカチカチカチ
今のは……い……？
――とにかく
この扉は追々
調べていく必要が
ありそうだ
一旦 報告に
戻るとしよう
そうするしか
なさそうだな



……
カツ
今日は学院長は不在だったわよね
ああ じゃあ報告は後でサラ教官に…
リィン・シュバルツァー
…パトリック
こんなところにいたのか つたく手間をかけさせおって
何…？
学内の案内ありがとうございました
いいや じゃあ僕はこれで…！
？

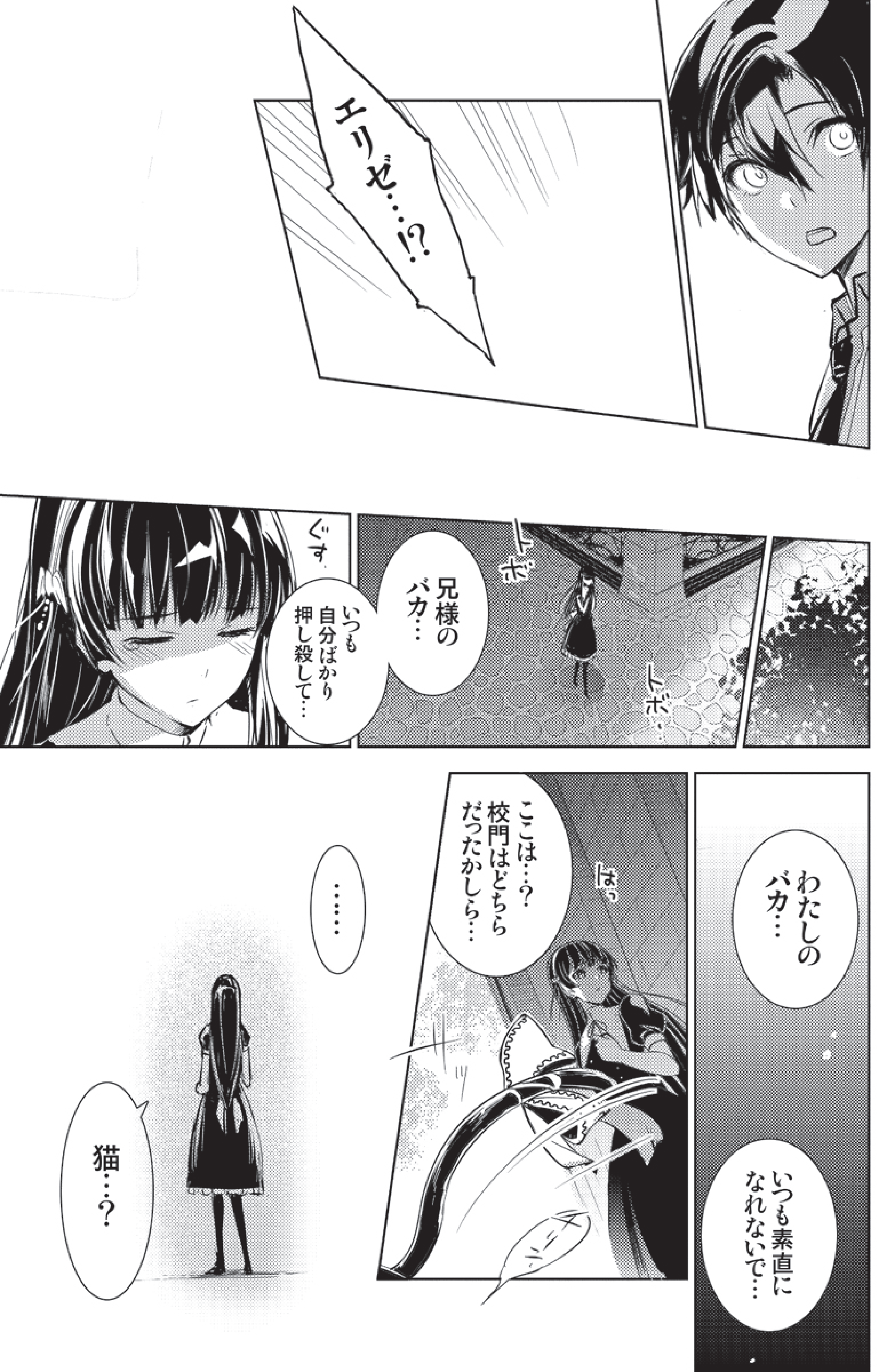


お久しぶりです リィン兄様
エリゼ…!?
本当に久しぶりだな 7ヶ月ぶりか…
ええ 去年の暮れ 私がユミルに帰った時以来になりますね
春 兄様がこちらに入学してから 会える機会はあったはずなのに 妹の顔を見るのに その程度の時間すら割けないほど お忙しかったということですね
わ…悪かった！
実習や試験で忙しかったのは確かだけど……でも…


その……年末会った時によそよそしかった気がしたからさ
男兄弟がうっとうしくなったのかと つい遠慮したというか…
よそよそしくなんてしてません！
あれはそのちょっと個人的な事情があったというか…
と とにかく！私が兄様をうっとうしいと思うなんて天地がひっくり返ってもないです！
そ そっか…なら嬉しいけど
でもそれを言いにわざわざこんな時間に…
これは…この前 俺が送った手紙…？
この手紙の…最後の部分です…
卒業後は軍に行く可能性が高いし
そうでなくても家は出るつもりだ
その前に父さんと母さんには
親孝行がしたいと思っているから
そのうち相談に乗ってくれ
——それじゃあ また
くれぐれも身体には気をつけて
リィン・シュバルツァー
……「そうでなくても家を出る」ってどういうことなんですか…？
父様と母様に親孝行って… どうして改まって言うんですか？
……
まさか…
家を継ぐつもりがないとかそんなわけありませんよね…？
俺はシュバルツァー家を
男爵位を継ぐつもりはない
——その まさかだ


当然のことだろう？
そもそも俺は養子で血の繋がりなんてない
そ そんなのおかしいです！
お前が将来婿を取って男爵家を継ぐのが筋のはずだ
たとえ血の繋がりがなくともシュバルツァー家の男子は兄様ただひとり…
帝国法でも養子の家督相続はちゃんと認められているはずです！
それは大抵引き取られた子が
しかるべき血筋だった場合だ
12年前──ユミル領主である父さんが拾った吹雪に埋もれていた〝浮浪児〟……
自分の名前以外は覚えておらずどういった出自かもわからない……
そんな子供を養子として迎えたばかりに父さんは社交界のゴシップの的になった
常識外れの酔狂だのよりにもよって〝隠し子〟だの…
『高貴な血を一切引かぬ雑種を貴族に迎えるつもりか！』なんて難癖をつけた貴族もいたらしい
そうして父さんはそういった雑音が疎ましくなってしまって…
ユミルから出ず滅多に社交界に顔を出さなくなってしまった……
これ以上 俺はシュバルツァー家に迷惑をかけたくない
さすがに貰った姓まで返すのは難しいだろうけど…
それでもお前の将来に迷惑をかけるのだけは避けたいんだ
来年は16歳──社交界デビューの歳だろう？
……！


だから どうか わかってほしい
家を出たとしても ユミルにはたまに 顔は出すし 育ててもらった 恩はずっと…
……わかってない
兄様 全然 わかってない……
父様の気持ちも… 母様の気持ちも…
フラ…
え
……わたしの 気持ちも……
エリゼ…？
ダッ
兄様のバカッ…！
朴念仁！
わからず屋！
大ッキライ!!!


エリゼ…!?
トボ
トボ…
兄様の バカ…
ぐす…
いつも 自分ばかり 押し殺して…
わたしの バカ…
いつも素直に なれないで…
はっ
ここは…？ 校門はどちら だったかしら…
……
猫…？



地下に眠るものが目を覚ます――!?　コミックス第2巻は3月10日発売！



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！



手のひらから冒険に出かけよう!

iOS／Android版 イースⅡクロニクルズ

現在でも多くのファンを魅了し続けている「イース」シリーズ、スマートフォン版タイトル第２弾がゲームスタジオ「DotEmu」より配信開始！ 2009年にPSP版として発売された『イースⅠ＆Ⅱクロニクルズ』をベースに、タッチ操作やバーチャルパッド対応などスマートフォンでのプレイに最適化。好評を博したグラフィックモードの切り替えはもちろん、新たなヒント機能なども搭載してスマホならではの楽しみが追加されている。スマホとタブレットでどこでも名作を体験しよう！ 詳細はApp Store、Google Playから。600円。







東京ザナドゥ 公式ビジュアルコレクション

『東ザナ』初のビジュアルブック!



『東京ザナドゥ』の世界観が詰め込まれたイメージビジュアルや販促イラストの他、ゲーム内で使用されたカットインや初公開となる初期デザインラフまで、美麗なイラストを網羅したファン待望のビジュアルブックが発売中！ OPアニメの原画など、ここでしか見られない貴重な資料も収録されている。ゲームをクリアした後も、ビジュアルブックと合わせて『東ザナ』の世界をより深く楽しもう。2160円（税込）。

PS3版『閃の軌跡』シリーズ期間限定値下げ

お手頃価格で購入のチャンス!

マガジン本誌で本編コミカライズも連載中、『英雄伝説 閃の軌跡』とその続編である『英雄伝説閃の軌跡Ⅱ』のダウンロード版がPSストアにてこの春限定の大幅プライスダウン！ 対象商品は２作品、『英雄伝説 閃の軌跡 PlayStation3 the Best』は30％ OFF、『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ（PS3版）』はなんと50％ OFF。また、PS®Plus会員の場合はよりお得な値段で購入することが可能となる。まだプレイしていない人はこの機会を見逃すな！ 詳細はPSストア公式サイトまで。



限定 スリーブ ジャケット入り!



東京ザナドゥ SAKURAまつりパッケージ

ファルコム1年生はこのタイトルから!

高校生たちの等身大の群像劇と爽快なバトルで大人気を博したアクションRPG『東京ザナドゥ』のロングセールスを記念して、春らしさたっぷりの限定パッケージがお求め安い価格になって発売決定！ また、このパッケージの購入者限定で、主人公・コウの幼馴染みであるシオリがモチーフとなった本革製の栞をプレゼントするキャンペーンも開催される。卒業や入学の記念にPS Vitaを購入した方の最初の１本に、また贈り物としてもオススメのパッケージとなっている。３月24日発売。3,780円（税込）。



『シオリの栞』
（絵柄４種×カラーパターン４種）

『英雄伝説 閃の軌跡 02』

3月10日、ついに発売!!



●書籍情報
脚本：恵村まお／漫画：さがら梨々
定価：1000円（税込）

『英雄伝説 閃の軌跡 メンタルクロスリンク』

全国書店にて好評発売中!!



●書籍情報
著：草薙アキ／イラスト：YahaKo
定価：1,400円（税込）



ファルコムヒロインが好き！ 第3回

こんにちは！ 葵カナンです
ついにイースⅧの発売が決定しましたね！
もうすでに夏が楽しみで仕方がありません
ということで 今回はイースシリーズの
初代ヒロイン皆さんご存じの
フィーナを描かせて
頂きました

自分が最初に
出会ったフィーナは
MSX2版イースでした
当時「RPGは優しさの時代へ」突入したわけですが
ゲーム中にはまだアニメーションはもちろん
顔グラフィックすら
表示されることはまれでした

ゲーム内の小さなドットで描かれたフィーナの姿から
マニュアルに描かれた可憐なイメージイラストとを
重ね合わせてその様子を思い描いていたものです

さて今回のイラストでは
セガサターン版「ファルコムクラシックス」に収録されていた
イースⅠの衣装をベースにしてみました

リメイクやシリーズを重ねるごとにグラフィックも洗練され
今ではフィーナといったら翼を携えた女神
という印象の方が強いかもしれません
ですが 自分としてはどうしてもこちらのイメージで描きたかった…！
そして今でも水色ロング髪が好きなのは
間違いなくフィーナの影響で
彼女こそまさに永遠のヒロインと言えましょう！

ということで今回はこのへんで
またお会いしましょう～！

エステル&ヨシュアの ファルコム空の軌跡ラジオの舞台裏



バレンタインで大盛り上がり？の 2月配信回をチェック！

『空SC Evo』の発売から1ヶ月ちょっとが経ち、周回プレイをしつつ『空 the3rd Evo』の発売を心待ちにしている人も多いはず。第19回はバレンタイン直前の配信ということで、「軌跡の世界にもしバレンタインデーがあったら？」というテーマで盛り上がりを見せていました。案の定、オリビエやアガット、ロイドはひどい目に……。たまにはオチとして使われない彼らの活躍も見てみたいものです。また、2月配信回からは、『イース』に関するニュースもラジオの方で語られているので、『イース』ファンの人もぜひ、チェックしてみてくださいね！



みんな解けるか?! ファルコム検定

毎回『空の軌跡』に関するクイズを出題し、リスナーが“あえてボケる”という、検定とは名ばかりの大喜利コーナー。オリビエの用法容量にはくれぐれもご注意を！



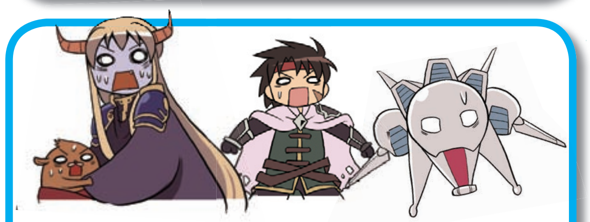
ファルコム ミュージックライブラリー

『めんどくさいラジオ』でも大人気だったこのコーナーは『そららじ』でも継続！ ファルコム作品の魅力溢れるBGMを毎回たっぷりと聴くことができるコーナーだ！



言葉の小箱

『そららじ』の看板コーナーになりそうなこの企画。エステルとヨシュアに自分が考えた掛け合いを喋ってもらえるという、夢のようなコーナーになっているぞ！
投稿をする時は、どちらのセリフか分かるように書くのが採用率アップのポイント！



あ、あんですって～？！ ファルコムニュース

ファルコム作品の最新情報をお届けするニュースコーナー。思いがけないニュースを聴くことができるかも？

エステル&ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ
■配信日 毎月2回（金曜日）更新 ラジオ公式ホームページ、日本ファルコムYoutubeチャンネル、ランティスラジオにて公表配信中
■公式ホームページ http://www.sora-evo.com/radio/

『イース』シリーズ最新作を受けて あの“迷盤”のシナリオが再登場！

イース＆空の軌跡vs.ヴァン・ジョー



前作『セルセタの樹海』から4年。『イース』シリーズ最新作『イースⅧ-Lacriomosa of DANA-』の情報が続々と到着していることを受け、あの“迷盤”ドラマCDシナリオの再収録を敢行！ 今なお続く『軌跡』シリーズと『イース』シリーズが邂逅を果たしたドタバタ劇をぜひ楽しんでほしい。

■イース＆空の軌跡vs.ヴァン・ジョー

【キャスト】
アドル・クリスティン：草尾毅
エステル・ブライト：神田朱未
ヨシュア・ブライト：斎賀みつき
アイシャ＝サリ＝エドナス：三上枝織
ティータ・ラッセル：今野宏美
エリカ・ラッセル：雪野五月
ダン・ラッセル：草尾毅
アガット・クロスナー：近藤孝行
オリビエ・レンハイム：子安武人
ガッシュ：佐藤拓也

ナレーション：銀河万丈
ダーム：銀河万丈
ガルバラン：銀河万丈
アグニージャ：銀河万丈
ギャラクシー・ヴァン・ジョー：銀河万丈

○アバンタイトル

ナレ　「失われし大地。その名を《ザナドゥ》。かつて桃源郷と呼ばれたこの地を支配せんとした、《魔王ガルシス》。その野望は、異世界から来た戦士達によって打ち砕かれた。彼らは元の世界に戻り、それぞれの日々を暮らしていたのだが……」

■第1章

エステル　「第1章。またしてもザナドゥ」

○森の中

寝ているエステル。

エステル　「Zzz……」

ヨシュア、起こす。

ヨシュア　「起きて、エステル」

エステル　「んんぅ……もう朝ぁ？」

ヨシュア　「エステル！　何かおかしいんだ。気づいたら、こんなところに……」

鳥たちの鳴き声（ちょっとおどろおどろしいやつ）

エステル　「……あー、夢か」
ヨシュア　「え?」
エステル　「まだ夢見てるのよ。じゃ、もいっかい寝るー。おやすみー」
ヨシュア　「エステル、起きて！　夢の中で夢を見てるってこと自体がおかしいじゃないか！」
エステル　「むずかしいこと、わかんないー」
ヨシュア　「エステル、起きて、エステル！」

×　×　×

エステル　「ふわぁ……よく寝た」
ヨシュア　「目が醒めたら全然違うところにいたっていうのに、冷静だね、君は……」
エステル　「遊撃士たるもの、何事にも動じない強い心を持たないとね！」
ヨシュア　「鈍感なだけだと思う……」
エステル　「ていうか、ここ、ザナドゥじゃない?」
ヨシュア　「え……」
エステル　「ほら、前にも飛ばされたじゃない。なんか気づいたらここにいてさ。で、ヨシュアと会えたけど、操られてて」
ヨシュア　「そうだ……それで、君とアドルさんに助けてもらって……でも待って。あの時確か、魔王ガルシスを倒して、この世界は平和になったんじゃ」
エステル　「そういえば、そうよね。あの……ほら、なんとかかんとかーって剣を使って！」
ヨシュア　「あのね……なんとかかんとかじゃなくて……」
次の2セリフ、ふたり同時に。
エステル　「ナントカカントカー」
ヨシュア　「ドラゴンスレイヤー」
エステル　「ほら、だいたいあってるじゃない」
ヨシュア　「カケラもあってないよ！」
ガサガサと草が揺れる音。
エステル　「誰!?」
ナレ　「草むらから、アドルとアイシャが現れた」
アドル　「君たちは……！」
ヨシュア　「アドルさん！　それに……」

エステル　「久しぶりー！　あ……あ……」
アイシャ　「アイシャよ、ア・イ・シャ！　まったく、直前にナレーションが言ってるんだからちゃんと聞いててよ！」
エステル　「あはは、ごめんごめん。でも久しぶりだねー。元気してた?」
ヨシュア　「待ってエステル！　前みたいに、操られているかもしれない」
アイシャ　「それはこっちのセリフよ！」
ナレ　「操られている目ではないとアドルは首を振った」
アイシャ　「そう言われれば……」
エステル　「私たち、またいきなり連れてこられて困ってるの」
アイシャ　「それはこっちもよ。ね、アドル」
ナレ　「アドルはうなずいた」
ヨシュア　「そうですか……」
エステル　「なら、とにかく歩いて、情報を集めないとね。今のままじゃ、なにも分からないわ」

×　×　×

ナレ　「こうしてアドル一行は、エステルたちを仲間に加えて、旅を続けるのだった」
エステル　「ちょっとー、あたしたちが最初に登場したのに、どうして『アドル一行』なのよ！　納得いかないんですけど」
ナレ　「え?　そう言われても……。とにかく、旅を続ける一行の前に、ひとりの男が現れた」
アガット　「おおっと、待ちやがれ！」
エステル　「アガット！」
ヨシュア　「気をつけて、エステル。なんだか様子がおかしい」
アガット　「へっ……おい、そこの赤毛！」
アドル　「え、僕?」
ナレ　「アドルは、自分を指差した」
アガット　「そう、お前だお前。悪いがここで死んでもらうぜ」
エステル　「ちょっと！　なに言ってるのよ！」
ヨシュア　「やはり、操られているみたいだ」
アイシャ　「でも、魔王ガルシスはあたしたちの手で倒したじゃない。だとしたら、いったい誰が……」
アガット　「操られてるだぁ?　へっ、カン違いしてもらっ

ちゃ困るぜ。俺はただ……」
アイシャ「ただ？」
アガット「そこの赤毛と、キャラがかぶるのがガマンならねぇんだよ！」
エステル「……はい？」
アガット「赤毛キャラはこの世界にふたりもいらねぇ！　どっちが真の赤毛キャラか、この場でハッキリさせてやる！」
ヨシュア「そんな理由で……」
アガット「問答無用！　はあーーーーーっ！」

キン！　と剣で剣をはじく。

アドル「ぐっ！」
ナレ「アドルは、とっさに剣で受け止めた」
アガット「やるじゃねえか……そうこなくちゃな！」
アドル「はっ！」

しゃっ！　と剣を振るうアドル。

ナレ「アドルは、剣を振るった」
アガット「そんなんじゃあたりもしねえぜ！」
アドル「やあぁ！」
ナレ「アドルは、さらに剣を振るった」
アガット「よっと！　今度はこっちからだ！　はあっ！」
ナレ「アドルは、身をかがめて剣を避けた」
アガット「ほらほら、どうしたどうした！」
ナレ「アドルは、最初の剣をすんでのところでかわし、次は自らの剣ではじき、さらに次の剣を受け流しつつ……」
アドル「あの、ちょっと」
ナレ「剣は火花を散らしながらぶつかり合い、アドルは……」
アドル「ちょっと！」
ナレ「なんですか!?　いま大事なシーンの真っ最中で……」
アドル「うるさいんだけど」
ナレ「え？」
アドル「戦いに集中出来ないから、少し黙っててくれないか？」
ナレ「でも、これが私の仕事ですし……」
アドル「戦闘中にナレーションがついた事なんてなかったじゃないか」
ナレ「そ、そうなの？　アレ？　そうだっけ？　そう言われてみれば……でも今さらやめるのも……。え、どうしても？　……はーい、わかりました。それじゃ手っ取り早く。アドルはアガットを倒したっと」
アドル「たーーっ！」
アガット「そんなの、アリかよっー！　ぐあっ……！」

ばたり、とアガットが倒れる音。

ヨシュア「アガットさん！」
アガット「ぐ……いったい俺は、なにを……」
エステル「よかった！　正気に戻ったのね」
アガット「教えてくれ、エステル、ヨシュア。いったいここは……」
エステル「ザナドゥよ。前にも来たことあるでしょ？　どうやら、また同じように飛ばされて来たみたい」
ヨシュア「いや……前とは違う」
アイシャ「なんですって？」
アガット「前とは違うって、どういうことだ、ヨシュア!?」
ヨシュア「前より……ユルい」
アイシャ「は？」
ヨシュア「ユルいんだ。アガットさんが襲ってきた理由は『赤毛キャラがかぶるから』だし、アドルさんは普通にナレーションに突っ込んでるし」
エステル「そう？　ザナドゥってそういう世界じゃなかったっけ？」
ヨシュア「違う！　目を覚ましてくれエステル！　君もこの世界に来てからなんか変じゃないか!?」
アガット「変っつーか……」
アイシャ「エステルって、もともとこういう人でしょ？」
ヨシュア「えっ？」
アイシャ「細かいことは気にしない」
アガット「なにが起きても『ま、いっか』」
ナレ「アドルは、同意して深くうなずいた」
ヨシュア「た、確かにそういうところはあるけど……」
エステル「いやー、そんなに褒められると照れるわねぇ」
ヨシュア「褒めてないよ！」
アイシャ「心配することないんじゃない？　まだ序盤だし、これからこれから」
エステル「だよね～」
ヨシュア「……この二人、似てるのはツインテールだけじゃないのか」

アイシャ「きっとラストにむけて、ガンガンと盛り上がっていくのよ！」

ダーム「いや、お前達の冒険は、ここで終わりを告げるのだ」

ハッ！ と息を呑む一同。

アイシャ「誰!?」

ダーム「久しいな、アドル＝クリスティン」

アドル「お前は……ダーム！」

※ダームは巨大な黒真珠の形をしています。

エステル「見てみて、ヨシュア！ でっかい黒真珠よ！ うわ～高そう～！」

ヨシュア「エステル……いまはそういうこと言ってる場合じゃないと思う」

アイシャ「あれ、なんなの？ アドル」

アドル「奴は魔王ダーム。すべての魔物とすべての魔法の根源だ」

ナレ「アドルは超簡単に説明した」

アガット「すべての根源だと!?」

アイシャ「とてつもなくやっかいそうな相手ね……」

アドル「どうしてお前がこの世界に!?」

ダーム「ククク……この世界に召還されたのが、貴様たちだけだと思うなよ」

アドル「お前も召還されたというのか……！」

ダーム「貴様たちの命運はここで尽きる。すべての魔法は、私には通用しないのだからな。クククク……ハハハハハ！」

アドル「くっ……ここには、クレリアソードはない。一体どうすれば……」

エステル「ボルカニックレイブ！」

ヨシュア「シャドウスピア！」

アーツ発動音。

ダーム「ぐあーーーっ！」

エステル「よし、効いてる効いてる」

ダーム「な、なぜだ……あらゆる魔法は通じぬはず……」

エステル「だって、アーツって普通の魔法じゃないし」

ダーム「な、なに!?」

アイシャ「なるほど！ あたしたちの世界の魔法とは、理(ことわり)が違うものね。そりゃ効くわけだ」

ダーム「そ、そ、そんな理屈が通じるものか！」

ヨシュア「そう言われても、通じちゃってますし」

エステル「ね、次はクラフトが効くか試してみましょ」

アガット「それじゃ俺の出番だな……へへへ、覚悟しろよ、この石っころ！」

ダーム「石ではない！」

アガット「細かけぇことはどうだっていい！ いくぜ！ ドラグナー、エッジィ!!」

アガット、クラフト発動音。

ダーム「ぐあーーーーーーーーっ！」

ダームが砕け散る音。

ナレ「ダームは、こなごなに砕け散った！」

アガット「よっしゃあ！」

チャリーンチャリーンと、ドロップアイテムを拾う効果音。

エステル「♪黒真珠、黒真珠～、売ったらお金がいっぱいで、いい武器いっぱい買える～」

アイシャ「落ちてるものは根こそぎ拾う！ 基本よね～」

アドル「これなら凄い装備が合成できそうだなぁ」

ナレ「アドルはダームのカケラを集めながら微笑んだ」

エステル「ちょっとアガット！ いつまでもガッツポーズしてないで拾いなさいよ！」

アガット「お、おう」

かちゃかちゃと拾い集める音。

ヨシュア「……やっぱり、ユルいんじゃないかな」

エステル「こらー、ヨシュアも手伝いなさい！」

■第2章

ティータ「第2章。真のヒロイン？」

○森の中

ナレ「ダームを倒したアドル……とエステル一行は、

エステル「前回の決戦の舞台となった奇巌城をめざし、旅を続けていた」

ヨシュア「他に手がかりもないしねー」

アイシャ「ま、こうしていれば、そのうち、同じように飛ばされてきた人と、合流出来るかもしれないじゃない」

ポロン、とリュートの音。

オリビエ「やぁ」

エステル「オリビエ！　あなたもこの世界に来てた……」

食い気味に。

ナレ「アドルは身構えた」

エステル「え……どうしたの、アドルさん？」

ヨシュア「気をつけて、エステル。目が普通じゃない」

オリビエ「おや、見破られてしまったか。さすがはヨシュア君、僕のことをよく観察しているね。愛をひしひしと感じるよ！」

ヨシュア「違います」

エステル「そういうことなら、一発ぶん殴って、目を覚まさせてあげるわ」

アガット「おいおい、いくら相手が変態とはいえ、いきなりぶん殴るっつーのはよくないんじゃねーか？」

オリビエ「ふふふ……何かごちゃごちゃ言っているようだけど、コレを見て、まだ悠長なことを言っていられるかな？」

ナレ「オリビエは自分の背後から、小さな少女を連れてきた」

ティータ「エ、エステルお姉ちゃん！」

エステル「ティータ!?」

オリビエ「さぁ、どうするかね諸君？　こちらには人質が……」

アガット「ファイナルブレイクゥッ！！！」

ドカーンと爆発音。

オリビエ「あーれー」

キラーンとお星さまになるオリビエ。

アガット「無事か、ティータ!?」

ティータ「は、はい、平気です。えへへ……アガットさんに助けてもらっちゃった」

エステル「あの～アガットさん？　いきなりぶん殴るのは良くないんじゃなかったの？」

ヨシュア「しかも、最終奥義を出すなんて……極端すぎる気が」

アガット「う、うるせぇ！」

エステル「でも、どうしてティータはオリビエと一緒に？」

ティータ「うん……私、この世界に飛ばされちゃって、ひとりぼっちで、すごく不安で……そんなときに、オリビエさんが現れたの」

○回想シーン

回想シーンなので、多少わざとらしい演技で。

ティータ「すんすん、すんすん。ひとりぼっちはさみしいよぉ」

オリビエ「お、お、お、お嬢ちゃん。ここここんなところでどうしたの？」

ティータ「あ、オリビエさん！」

オリビエ「お、お、お、お嬢ちゃん。アメ、アメあげるからついておいでドゥフフ！」

ティータ「アメくれるの!?　うん！　一緒にいくー！」

回想シーン終了。

○森の中

一同「…………（声にならない感じ）」

ティータ「あれ？　みんな、どうしたの？」

エステル「ティータ！」

ティータ「は、はい」

エステル「知らない人について行っちゃ、ダメ！」

ティータ「え？」

アガット「そうだぞティータ！　世の中にはな、こわーいものがいっぱいあるんだ！　だから、アメあげるとか言われてホイホイついて行くんじゃねぇ！」

ティータ「え？　で、でも、オリビエさんは知らない人じゃないし……」

ヨシュア「知らない人より危ないよ、あの人は」

エステル「ヨシュアの言うとおり！　いいティータ、知らない人とオリビエにはついて行っちゃダメ！　例えアメをもらおうと！　わかった？」
ティータ「う、うん、わかった！」
アイシャ「……なんなのかしら、これは」

○城の前

ナレ「一行は、ティータが見つけたという、城に向かって歩いていた」
ティータ「ひとりぼっちで歩いている時にね、見つけたの。でも、なんだか怖そうだったから、近寄れなくて……」
アイシャ「あ、お城が見えてきたわ！」
ナレ「アドルは、急に立ち止まった」
アイシャ「あれ？　どうしたの、アドル？」
アドル「人がいる」
ナレ「アドルが指差した先には、ハルバードを背負った、ひとりの男が立っていた」

ガッシュ、歩いてくる足音。

ガッシュ「久しぶりだな」
エステル「あの人って、アドルさんの知り合いの……」
ヨシュア「ガッシュさん、だったよね。よく覚えてるよ。かなりの達人だった」
アイシャ「ガッシュ、あなたまでこの世界に？」
ガッシュ「ああ。また呼ばれるとはな。とはいえ、今度は誰かに操られるなんてヘマはしなかったが」
アガット「なら話が早ええ。戦わずに済むな」
ガッシュ「それは……どうかな」

ガッシュ、ハルバードをアドルに向ける。

ナレ「ガッシュは、ハルバードをアドルに向けた」
一同「えっ？」
アイシャ「ちょっと、なにしてんのよ！」
ガッシュ「アドル、ひさしぶりに、アンタと手合わせしたくなってね」
ナレ「アドルは首を横に振った」
アドル「今は戦っている時じゃない。君もわかるだろう」
ガッシュ「わからねえな。戦いたいから戦う、戦士にとってそれ以上の理由が必要か？」
エステル「なにバカなこと言ってるのよ！　あのね……」
ガッシュ「女子供はすっこんでろ！　それに、俺を倒せないようじゃ、この先に進んでも無意味だぜ。……どうする、アドル？」
アドル「……仕方ない」

剣を抜く音。

ナレ「アドルは剣を抜いた」
ヨシュア「アドルさん！」

かちゃり、と剣の音。一歩歩みを進めるアドル。

ティータ「ダ、ダメーーーッ！」
ナレ「ティータが、二人の間に割って入った」
アガット「ティータ！　あのバカ！」
ガッシュ「!?」
ティータ「あ、あの、その……」
ガッシュ「な、なんだ？」
ティータ「お、お友達同士で戦うなんて、よ……よくないことだと、思いますっ！　な、仲良く、した、方が……うぅ……」
ガッシュ「じゃ、邪魔する……な」
ティータ「でもでも、思い出してください、前はみんなで力をあわせて戦ったじゃないですか、それなのに……」
ガッシュM「こいつ…、こんなにちっちゃくて、力もないくせに……そうだ！　あの時も一生懸命で……必死で……か、可憐だった……」
エステル「ムダよ、ティータ！　その人は、誰の説得も……」

ガッシュ、ハルバードを納める。

ナレ「ガッシュは、ハルバードを納めた」
エステル「え？」
ガッシュ「今日のところは、そこのチビに免じてやめといてやる」
エステル「え、あ、あのー、さっき私が言ったときは、女子供はすっこんでろって……」
ガッシュ「オホン！　この城には、なにか秘密があるようだ。いくぞ、アドル」
ティータ「あ……あの」

ガッシュ「な、なんだ?」
ティータ「ありがとうございます、ガッシュさんっ!」
ガッシュ「……べ、別に、礼を言われるようなことじゃない。さ、時間が惜しい。行くぞ」
ガッシュM「可憐すぎる……なんだこのドキドキは……どうした、どうしたんだ俺!」
ガッシュが真っ赤になって歩き出す。
アイシャ「顔、赤くなってるわね……」
ヨシュア「完全に落ちたね」
エステル「ティータ……おそるべし」
ナレ「しかし、ガッシュの気持ちは良くわかる、とアドルはひとりうなずいた」
アガット「いいか、ティータ。あの黒髪野郎の側に近寄るんじゃねえぞ」
ティータ「ほえ~? ど、どうしてですか?」
アガット「(かぶり気味に)どうしてもだ!」

○王座の間
ナレ「一行は、城の奥深くへと進み、王座の間らしきところに出た」
アイシャ「なーんか、イヤな感じがするわね」
アガット「おいティータ、あんまりウロチョロするな」
ティータ「でもこの王座、なんだか不思議な形をしてるんですよ。何か機械仕掛けがあったりするのかな……わくわく」
ガルバラン「フフフ……のんきなものだな」
ガッシュ「何者⁉」
ヒュンヒュンヒュンヒュン触手の音
ティータ「え……やあっ⁉」
ナレ「ティータが触手に絡めとられ、その背後に異形の者が現れた」
アドル「お前は……ガルバラン!」
エステル「今度はなに~⁉」
ヨシュア「なんて禍々しい姿だ……」
アドル「ガルバラン、お前まで召喚されていたのか!」
ナレ「アドルは、かつてフェルガナで戦った魔王だとみなに説明した」
エステル「は、はぁ……アドルさんって、すんごい敵とばっかり戦ってるのね」
アガット「感心してる場合じゃねーだろ! ティータのやつが!」
ティータ「はうぅ~!」
アガット「くそっ! ティータを離しやがれ、このばけものぉぉぉ!」
突っ込むアガット。ヒュンヒュンヒュン触手の音。バコッ!っとアガットはじかれる。
アガット「ぐわっ! くそぅ、近づけねぇ」
エステル「ねぇ、スキを見て、なんとかティータを助け出せない?」
ガッシュ「無理だ。あの無数の触手。迂闊に手を出すのはマズい」
ガルバラン「これからは、ガルバランの時代が始まるのだ! その手始めに、我が力を思い知らせてくれる!」
ドドドドドと地鳴りのような足音、遠くから近づいてくる。
ヨシュア「この音は、いったい……」
エリカ「うおお~~~~~~~~~~~~~っ!」
エステル「あの人は……エリカさん⁉」
エリカ「ティータァァァァ、今助けるわーーーーーーっ!」
ガルバラン「な、何やつ⁉」
エリカ「エリカァーーー、インパクトォーーーーーーーーーッ!」
ガルバラン「ぐあーーーーーーーーーーっ!」
ど派手な爆発音。
アドル「すごい……あのガルバランを、一撃で葬るなんて」
ナレ「説明しよう! エリカインパクトとは、愛する一人娘ティータにピンチが訪れた時のみ出せる、エリカの究極奥義である! ティータへの異常なまでの愛を強大なエネルギーに変え、核分裂に匹敵する爆発を起こすのだ!!」
エステル「なに説明してるのよ! っていうかなんなのその技は!」
エリカ「ティータ、無事⁉ しっかりして!」
ティータ「お母さん……?」

エリカ「あぁ、ティータ！　よかったわぁ～！　もうぎゅ～ってしちゃう！　ぎゅ～！」
ティータ「く、苦しいよぉ、お母さん……えへへ」
アイシャ「あの人って……ティータのお母さん？」
エステル「そ。ティータがだーい好きなの」
ヨシュア「だからって、究極奥義はやり過ぎだと思う……」
エリカ「さぁティータ、行きましょう」
ティータ「え？　でも、みんなと一緒に」
エリカ「行・き・ま・しょ・う！」
アガット「お、おい！」
エリカ「シュタッ！　シュパパパパパ！」
ティータ「あれ～～～～」
ナレ「エリカはティータを連れて、目にも止まらぬ速さでいなくなった」
一同「…………」

■第3章

○門の前

オリビエ「第3章。食い気or色気」
ナレ「ティータと別れ、奇巌城を目ざし旅を続けていた一行の前に、巨大な門が立ちはだかった」
エステル「でっかいわねー！」
ガッシュ「周りは山だし、この門をくぐり抜けるしかなさそうだな」
エステル「ん？　ねぇ、門のところ、なにか文字が書いてある」
ヨシュア「本当だ。見たことのない文字だけど……」
アイシャ「アドルなら分かるんじゃないかしら？」
ナレ「アドルは門に近づき、文字を読んだ」
アドル「『汝の色気を見せよ。さすれば道は開かれん』」
アイシャ「さっすがアドル、博学よね……って、色気？」
エステル「色気ってあの、あは～ん、とか、うふ～ん、っていう、あれ？」
ナレ「アドルはうなずいた」
アガット「おい、なんか読み間違えてんじゃねぇのか？」
ガッシュ「いや、アドルの考古学の知識は確かだ」
アイシャ「もう～、しょうがないわね～」
エステル「アイシャ……どうしたの？」

アイシャ「本当は～、こんなところで見せつけたくはなかったんだけどぉ、色気が必要だって言われたから仕方なく～」
ヨシュア「いや、まだ誰も必要だとは言ってないけど……」
アイシャ「それじゃ行くわよ～ん。うっふぅ～ん★」
それっぽいSEが鳴る。
ナレ「門は、反応しなかった」
アイシャ「お、おかしいわね。それじゃもう一度！　あっはぁ～ん★」
それっぽいSEが鳴る。
ナレ「門は、まったく微塵も反応しなかった」
アイシャ「う、うるさいわね！　なによそのカンに触るナレーションは！」
アガット「ま、小娘は放っておくとしてだ……おい、エステル」
エステル「え？　あ、あたし？　いやいやいや、無理無理無理無理！　色気とか全然ないし！」
ヨシュア「だよね」
エステル「……そこであっさり納得されるのも、傷つくんですけど」
ガッシュ「とはいえ、他に手はないしな」
アドル「エステル」
ナレ「アドルは、すがるような目でエステルを見た」
エステル「わ、わかったわよ。やるだけやってみる。……う、うっふ～ん」
ちーん、とかSE。
ナレ「門は、当然微動だにしなかった」
エステル「分かってはいたけど……やっぱりショックだわ」
ガッシュ「万策尽きたか……」
ボロン、とリュートを鳴らす音。
オリビエ「やぁ！　お困りのようだね、諸君」
エステル「オリビエ！」
アイシャ「またあんたなの～？」
アガット「っつーか、まだ操られてるんじゃねぇだろう

な……」

オリビエ「いやいや、さすがに目が醒めたよ。誰かさんがいきなり出した奥義のおかげでね！　それよりも、色気なら、この僕に任せてくれたまえ！」

エステル「任せてくれたまえって……だってオリビエ、男じゃない!?」

オリビエ「色気とは！　男女問わず、セクシィな人物にこそふさわしい。そう、この僕のように！」

アガット「おいオリビエ、ご託はいいから、とっとと始めろ」

セクシーな声で読み上げてください。

オリビエ「お安い御用さ。では……『そこの門を開けておくれ、愛しい仔猫ちゃん』」

ギギギ……！　と門が少し開く音。

アガット「扉が、動きやがった!?」

エステル「あ、あんですってぇ～……！」

オリビエ「ふふ～ん、どんなもんだい！」

アイシャ「なんでよ～！　納得いかなーい！」

エステル「色気で、オリビエに負けるなんて……がっくり」

ガッシュ「だが、少ししか開いてないぞ。これじゃ、人ひとり通れねえ」

オリビエ「ふ～む。ならばここは、最後の手段しかあるまい！」

ヨシュア「最後の手段？　それはいったい？」

オリビエ「それはだね……ムフフ」

ヨシュア「え？　あの、オリビエさん、どうして僕をなめ回すように見るんですか……」

オリビエ「さぁ来たまえ、ヨシュア君！」

ヨシュア「えっ、あの！　ちょっと！」

ナレ「オリビエはヨシュアを連れて、草むらへと消えていった」

エステル「あっ、ヨシュア！　ま、まさか……」

アドル「いったい何をするつもりなんだ？」

× × ×

ナレ「それから、しばらくして」

オリビエ「や～お待たせお待たせ」

アイシャ「まったく、いつまで待たせて……って！」

ナレ「オリビエは、見目麗しい少女を連れていた」

※エステル以外、ヨシュアが女装した姿と気づいてません。

アイシャ「なになに、誰なのその美少女！　うわー、かわいー！」

ナレ「アドルは、目を見開いて少女を見つめている。どうやら好みのタイプのようだ」

アドル「こ、こら、勝手なことを言うなよ」

アガット「てめぇ、ティータの時みたいにさらってきたんじゃ……」

オリビエ「ノンノンノン！　そんなんじゃないよ」

エステル「はぁ……やっぱりね。よくOKしたわね、ヨシュア」

エステル以外「えっ!?」

アイシャ「ほ、本当に、ヨシュア!?」

ヨシュア「うん……」

ガッシュ「これは……驚いたな」

オリビエ「さぁ、ヨシュア君、手はず通りに！」

ヨシュア「本当に、やるんですか？」

オリビエ「これも、みんなのためさ！　さぁ早く！」

ヨシュア「……はぁ」

ヨシュアの足音。

ナレ「ヨシュアは、門の前に立った」

ヨシュア「（無理して女の子っぽい声で）う、うっふ～ん」

ナレ「ヨシュアは、はいていたスカートを、たくし上げた！」

アガット・ガッシュ・アドル「おお～！」

重々しく門が開く音。

ガッシュ「何と、門が開いた！」

オリビエ「YES！　パーフェクトッ！　やはり僕の作戦は完ぺきだ！」

エステル「なんで……なんでヨシュアの女装姿で開くのよ～！」

アイシャ「納得いかない、納得いかないわーっ！」

○荒れ地

ナレ「一行は、門をくぐり、中に入った」

オリビエ「すぐに着替えてしまうなんて、残念だなぁ。

僕はずっとあのままの姿でよかったんだよ、ヨシュアきゅん★」

ヨシュア「断固お断りします。……だいたい、あの衣装はどこから出してきたんですか」

オリビエ「ひ・み・つ★」

エステル「ん？　くんくんくん」

ヨシュア「エステル？　どうしたの？」

エステル「いいにおいがする。こっちよ！」

ぐつぐつと鍋が煮える音。

ティータが、お料理をしている。

ティータ「（鼻歌）ふん、ふん、ふん～♪」

足音がして、エステルたち現れる。

エステル「ティータ⁉」

ティータ「あ、エステルお姉ちゃん！」

エステル「ティータがお料理してたのね！　どうりでいいにおい……」

アガット「（食い気味に）ティータぁぁぁぁ！」

オリビエ「ティータくぅぅぅん！」

アガット、オリビエ、ティータに駆け寄る。

ナレ「突然、ティータの背後から、エリカが現れた」

エリカ「あんたたちは、消えなさぁぁぁぁい！　フン！」

カコーン！　とバットでボールを打つ音。

アガット「ぐわぁ～～～～～～～」

オリビエ「なんで僕まで～～～～～～～」

キラーン、とお星さまになるアガット。

ティータ「お母さんひどいよ！　アガットさんにも、お料理食べてもらおうと思ったのに！」

エリカ「あの赤毛野郎に食わせるものなんて、パン屑ひとつないわ！」

エステル「相変わらずだな～、あはは……あとオリビエにも少しは触れてあげてね」

ダン「いったい、なんの騒ぎだい？　おや、君たちは……」

アイシャ「アドル⁉」

アドル「僕は後ろにいるよ」

アイシャ「へ？　あれほんとだ」

ヨシュア「ダンさん！」

アイシャ「えっと、今現れたこの人、エステルのお知り合い？」

エステル「うん。ティータのお父さんよ」

ガッシュ、マジトーンで。

ガッシュ「お、おおお父さん……初めまして、ガッシュと申します」

アドル「え？　僕はアドルだよ」

ガッシュ「なにぃ！　くそっ、俺としたことが……」

ダン「ややこしいことになってきましたねぇ」

エステル「ダンさんたちも、この世界に来てたんですね」

ダン「ええ、エリカさんと一緒にね。まあ、立ち話もなんですし、みなさん、よかったら食事でもどうですか？」

エステル「いいんですか⁉　やった～★」

×　×　×

ナレ「こうして一行は、食事を取ることにした」

エステル「あったかいシチューだー！　おいしそ～！いただきまーす！」

アイシャ「ん～、おいしい！　はぁ、この世界に来て、はじめてまともな食事にありつけたわ」

ガッシュM「可憐な上に料理もうまい……やばいぞ、俺。まじでやばいぞ」

ナレ「アドルは、黙々と食べている」

アイシャ「ちょっとアドル。少しは何かいいなさいよ」

アドル「え？　いや、あまりにおいしいから、夢中になって食べちゃって」

ティータ「お代わりまだありますから、たくさんどーぞ」

キラッ！　と目を光らせるエリカ。

エリカ「（ひそひそ声で）ティータ、あの男には気をつけなさい」

ティータ「どうして？」

エリカ「ご覧なさい、あいつは……赤毛よ！　赤毛の男に、ロクなのはいないわ！」

ティータ　「で、でも、アドルさんって悪い人じゃないと思うんだけどなぁ……お父さんにどことなく似てるし」

エリカ　「確かに……声はうりふたつなのよねぇ」

× × ×

ダン　「へぇ、アドルさんは冒険家なんですか。若い頃の僕と似てるな」

アドル　「ダンさんもですか?」

ナレ　「アドルは、スプーンを置いてダンを見つめた」

ダン　「僕の場合は、遊撃士という仕事ですから、厳密な意味での冒険家ではないですが。各地の秘境を旅したりもしたんですよ」

アドル　「そうなんですか」

ナレ　「アドルは深くうなずいた」

ダン　「アドルさんはどんなところに?」

アドル　「僕は、洞窟に入っていったり、塔に上ったり、浮遊大陸に飛んでいったりですね。あぁ、牢屋に入れられた時には、友人が壁を壊して助けに来てくれたりもしました」

ダン　「へぇ、それは楽しそうだ!」

ナレ　「アドルは、大きく目を見開いて、愉快そうに微笑んだ」

ダン　「あ、いま目を見開いたのは、アドルさんじゃなくて、ダンの方です」

ナレ　「あっ! す、すいません……いや、声がそっくりなんで、つい」

アドル・ダン　「はっはっは!」

× × ×

ティータ　「うぅ～、声だけ聞いてると、どっちがお父さんだか分からないよ～」

エリカ　「妻の私でも、迷うわ……」

エステル　「ところで、ここに来る途中に、ヘンな門があったでしょう? 色気がどうとか」

ティータ　「あ、うん。あったよ」

アイシャ　「どうやって開けたの? も、もしかしてティータちゃんが……?」

ガッシュM　「イケる。この可憐さならイケる……」

エリカ　「あぁ、あの門なら、私が開けたわよ」

エステル　「うっそ、エリカさんが!?」

エリカ　「なによその意外そうな顔は。仕方ないわね、実演してあげるわ。ティータ、ちょっとだけ目をつぶって、耳をふさいでなさい」

ティータ　「う、うん、わかった。ぎゅ～っ!」

ナレ　「ティータは、目を閉じて耳をふさいだ」

ヨシュア　「どうして、こんなことを?」

エリカ　「教育上よろしくないからよ。それじゃ、行くわよ。まず最初は、こういうポーズをして……」

エステル　「ちょっ、エリカさん!?」

ヨシュア　「そ、そんな、すごいこと……!」

エリカ　「それから……『どうしたら開けてくれるのかしら? ほら、言ってごらんなさい』」

アイシャ　「わ、わ、わ……!」

エリカ　「これはどう? あらぁ、もっとなの? うふふ、欲張りサンね。いいわ。じゃぁ、こんなのはどうかしら? 満足? ふふ、こんなこともしちゃうわよ。気に入った? うふふ、じゃぁこれならどうかしら? いいのよ、我慢しないで、さぁ、開けてちょうだい、あたしのために……」

エリカさんフェードアウト。かぶせてヨシュア&ガッシュ。

ヨシュア　「うわっ、あんなことまで! と、止めた方が良いんじゃないですか、ガッシュさん」

ガッシュ　「可憐だ」

ヨシュア　「カレンダー? なに言ってるんですか!?」

ガッシュ　「見てみろ。母親の言いつけを守ってあんなに必死に、ぎゅ～っと目をつぶって、耳をおさえてるあの手……可憐だ……可憐すぎる!」

ヨシュア　「ここまでメロメロにするなんて……ティータ、恐るべし」

■第4章

アイシャ　「第4章。お風呂でポン!」

○温泉場近く

ナレ　「一行は、エリカとダンを仲間に加え、奇巌城を目指して旅を続けていた」

アイシャ　「なんだかこのあたり、蒸し暑いんですけど～」

ガッシュ　「近くに火山でもあるんだろうな」

エステル「ん？　くんくん……なんか、ヘンな匂いがしない？」
ダン「おや？　この匂いは、ひょっとして……」
ティータ「お父さん、この匂いがなんなのか、わかるの？」
ダン「ああ。この先に、みんなが喜ぶものがあると思うよ」
ナレ「一行がさらに先に進むと、石造りの建物があり、その中には、もうもうと湯気を出す温泉があった」
エステル・ティータ・アイシャ「うわ～！」
ダン「やっぱりね。匂いで、そうじゃないかと思ったんだ」
エステル「お風呂、お風呂～♪　こっちに来てから、まともに水浴び出来なくて、もーイライラしてたのよね★」
ティータ「お父さん、どうしてこんなに立派な建物があるの？」
ダン「温泉が湧いた場所に、雨風をしのげるように建物を作った、ということじゃないかな」
ナレ「建物を調べていたアドルは、どうやら反対側にもうひとつ風呂があるようだと伝えた」
エリカ「ちょっといいかしら？　こんな場所に温泉があるなんて、いくらなんでも都合良すぎない？
　しかも二つ」
ナレ「いや、私にそう言われましても……」
エステル「もう、細かいことは気にしない♪　お風呂入りましょ、お・ふ・ろ！」
ヨシュア「僕たち男子は反対側に行きましょうか。エステルたちは、こっちを使って」
エステル・ティータ・アイシャ「はーい！」

○温泉場・女風呂

ナレ「こうして一行は、温泉につかることにした」
エステル「はーいティータ、目をつぶって～」
ばしゃーっとお湯をかける音。
ティータ「ふわ～」
エステル「はーいOK。……ん？　アイシャ、どうして入らないの？」
アイシャ、少し離れたところから。
アイシャ「ひ、人前で肌をさらすだなんて……はしたないわ」
エステル「も～、なに言ってるのよ。お風呂、気持ちいいわよ～」
アイシャ「けど……」
エステル「ええい、めんどくさい！」
エステル、ぺたぺたとアイシャの元まで歩いてくる。
アイシャ「な、なにをする気!?」
エステル「ほら、脱いだ脱いだ！」
アイシャ「う、うわっ！　やめ、やめてエステル！」
エステル「ふふふ～、よいではないかよいではないか！」
アイシャ「いやぁ～！」
ティータM「ああいう時のエステルお姉ちゃん、本当に楽しそうだよね……」
ぺたぺたと二人分の足音。
エステル「ほら、ここ座って。いま、背中流してあげるから」
エステル、お湯をかける。
エステル「うわ～、アイシャの肌ってすっごくキレイね。いいな～」
アイシャ「あ、あまり見ないでよ。恥ずかしい……」
エステル「え～、なんで？　こんなにキレイなのに」
ごしごしと洗う音。
エステル「（鼻歌）ふんふんふ～ん♪」
アイシャ「……あなたは、私が公女だって知ってるのよね？」
エステル「あーうん。アルタゴ公国だっけ？」
アイシャ「そう。……でも、普通に話したり、こうして、ふ、服を脱がせたりするのね……」
エステル「ゴメンね、私、かたっ苦しいの苦手で。怒った？」
アイシャ「別に怒ってはないわ。ただ……ちょっと珍し

いなって思っただけ。私が公女だってわかると、途端に口調を変える人ばかりだったから」

エステル「でも、そういうのってイヤじゃない？」

アイシャ「ええ……よく分かるわね」

エステル「私、親友にお姫様がいるから。あ、今じゃ女王様候補か。ほら、前にこの世界で一緒に戦った時にいたでしょ？　クローゼっていう子」

アイシャ「うん、覚えてる。……私なんかより、ずっと、らしかった」

エステル「ところが、ああ見えてクローゼっておてんばだったり、強情だったりするんだから」

アイシャ「そうなの？」

エステル「ま、そういうところ含めて、私は大好きなんだけどね。もちろん、アイシャもよ」

アイシャ「なっ……！　か、からかわないでよ」

エステル「あははっ！」

ざばぁ、とお風呂から上がる音。

エリカ「先上がるわよー」

ティータ「あ、ダメだよお母さん！　ちゃんと暖まらなくちゃ」

エリカ「お風呂なんて、汗とホコリを洗い流せればいいのよ。それに、重要なのは風呂上りの一杯。あー、飲みたい。キーンと冷えたやつを、グイッと！」

ナレ「エリカは、風呂上がりの一杯をこよなく愛していた。特にビールをである。いやぁ、あれは確かにうまい！」

エリカ「そうそうそう！　ってちょっと待ちなさい。なんであんたが解説してるのよ？　あんたは、アドルのナレーションでしょうが？」

ナレ「ナレーションは、どこにでもついていきます」

エリカ「だからついていくのは男湯だっつーの！」

○温泉場・男風呂

湯船に浸かるガッシュ。

ガッシュ「ふぅ……久しぶりの風呂は生き返るな」

ヨシュア「ダンさんも、一緒に入ればよかったのに」

アドル「見張りに立つからいいって。……もっとも、僕と一緒に入ると、聴いてる人が混乱するから、とも言ってたけど」

ヨシュア「大変なんですね、いろいろと」

オリビエ「いやぁ、本当にね」

ヨシュア、ちょっと驚く。水がばしゃっと跳ねる音。

ヨシュア「オリビエさん!?　いつの間に……」

ボロン、とリュートを鳴らす音。

オリビエ「この温泉は美容にもいいらしいからね。ここはぜひ、入っておかなくてはと思ってね！」

ボロン、とリュートを鳴らす音。

ヨシュア「……どうでもいいですけど、お風呂に楽器持ち込んだら、痛みますよ」

アドル「ゆかいな人だな、オリビエさんは」

ヨシュア「…………」

アドル「ん？　どうしたんだい？」

ヨシュア「いや、アドルさんの動作に、ナレーションが入らないのって、なんか新鮮だなと思って。いったいどこに行ってしまったんでしょう？」

ガッシュ「女子どもの風呂にいるぞ」

オリビエ「なるほどなるほど。って、どうして君はそれが分かるんだい？」

ガッシュ「人造妖精を放ってるんでね。状況は逐次伝わってくる」

オリビエ「ほー！　妖精を使ってのぞきとは、なかなかの高度テクだね」

ガッシュ「のぞきでじゃねぇ！　見張りだ！」

オリビエ「見張りねぇ。ちなみに～、エステル君、ティータ君、アイシャ君のうち、誰が一番ナイスバディ？」

ガッシュ「ふむ、その中ならエステルだな」

ヨシュア「ちょっ!?　やっぱりのぞいてるんじゃないですか！」

オリビエ「いやいや、君はなかなかのむっつりさんだね」

ガッシュ「ち、違う！　俺はチビの事が心配で！」

オリビエ「ほほう～、ガッシュくんのお目当てはティータ君だったのか～」

アドル&ヨシュア「なるほど～」

ガッシュ「だから納得するな！　だ、だいたい、女を追いかけまわすのは変態演奏家の専売特許だろうが！」

オリビエ「失敬な！　僕は美しいものなら男女を問わない！　例えばそう、そこにいるヨシュア君！」
ヨシュア「は、はい!?」
オリビエ「そのつややかな、玉のような肌……幼い頃から鍛え抜かれ、引き締まった身体……これもまた美！　僕は、ヨシュア君でも全然OK！」
ヨシュア「僕はNGです！」
ガッシュ「男にうつつを抜かすなど、まるで理解できん……」
アドル「ガッシュは、ティータのように小さい女の子が好きなんだね」
ガッシュ「なにさらっとすごい発言してるんだアドル！」
ざばぁーーん！　と風呂の中からアガットが出てくる。
アガット「ティータァッ！」
オリビエ「うわあっ！　ア、アガット君!?　いつの間に……」
ヨシュア「あなたが言わないでください」
アガット「ティータ、ティータはどこだぁ！」
ヨシュア「落ち着いてください、アガットさん！」
アガット「ティータァ！」

がしゃりと、風呂場の壁が崩れる音（石造りの壁です）
ナレ「その時、風呂場の壁が壊れた」
アドル「ドギ！？」
ナレ「違います、エリカです」
エリカ「策敵モード・オン！　対象、赤毛98％！……発見ッ！　ファイトぉ～いっぱ～つ！　飛んでけえ～～っ！」
かきーん！　とホームランの音。
アガット「またしても～～～～！」
ガッシュ「なぜ俺まで～～～～！」
キラーンと星になるふたり。
エリカ「成・敗！」
ヨシュア「あ、あの、エリカさん……タオルも無しで男湯に入るのは、その……」

アドル「第5章。そんな理由で呼び出され」

■第5章

○奇巌城・中心部

ナレ「温泉につかりさっぱりした一行は、ついに奇巌城に到着した！」
エステル「脱力する状況説明、ありがとう……」
ヨシュア「でもおかしい。前に来たときと違って、誰もいない」
アグニージャ「クククク……」
緊迫感のあるBGM流れはじめる。
エステル「誰!?」
アグニージャ「よくぞここまで来た……と言っておこう。だが、貴様たちの旅はここで終わる。そう、死という終焉を迎えるのだ！　この、アグニージャによって！」
じゃーん！　と派手なSE。

エステル「…………」
アドル「…………」
以下、ひそひそと話します。
エステル「……ねぇ、アドルさん」
アドル「うん？」
エステル「あれ、アドルさんが戦ってきた敵じゃないんですか？」
アドル「いや、あんな竜は見たことないな。そっちの世界の敵じゃないのか？」
エステル「知らないですよ、あんなの！　そりゃ、確かにレグナートっていう竜の知り合いいるけど、名前違うし」
ヨシュア「どうしよう、ここは適当に驚いた方がいいのかな？」
エリカ「あんなのほっとけばいいじゃない、めんどくさい」
アグニージャ「おまえらー！」
どしんどしんと暴れるアグニージャ。

アグニージャ「『破壊神』や『赤き竜』という異名を持つ、このアグニージャ様を知らないとはどういうことだー！」

エステル「とはいえ……知らないものは知らないし」

エリカ「知らない相手じゃ、なーんか盛り上がらないのよね」

アイシャ「だいたいさっきから、出てくる悪役みーんな同じ声じゃない」

ティータ「み、みんな、そんなに言ったらかわいそうだよ。あの竜さんだって、一生懸命やってるんだから……」

アグニージャ「好き勝手いうなぁーーーーー！」

どしんどしんと暴れるアグニージャ。

アグニージャ「もう怒った。完全に怒った！　やはり貴様らは、完ぺきに滅ぼさなければいけなかったのだ！　あーもうやるよ、俺はやるよ！」

ヨシュア「いけない！　怒りのあまり、キャラ設定を忘れかけてる！」

アドル「ああなっては、手のつけようがないぞ」

オリビエ「なら、ここは僕に任せてくれたまえ」

エステル「オリビエ！」

オリビエ「この僕の華麗なリュートの音色で、見事怒りを静めてみせよう！」

ボロン、とリュートを弾く音。

オリビエ「それでは一曲。あー♪」

アグニージャ「でこピン」

ペチ、という間抜けな音と共に飛ばされるオリビエ。

オリビエ「今回こればっかり〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

キラーン、と星になるオリビエ。

エステル「オリビエ……あなたの尊い犠牲は、ムダにはしないわ！」

ヨシュア「いや、あの様子だと、多分また戻ってくると思うんだけど……」

駆け寄る足音。

アガット「お前ら、無事か！」

ティータ「アガットさん！」

エリカ「チッ！　まだ生きてたか」

アガット「こりゃまた大物が相手だな」

ガッシュ「存分に腕が振るえるってもんだ」

アイシャ「ガッシュも戻ってきたのね！」

アガット「いくぜ！　てやーーーーーーーーっ！」

ガキン！　とアガットの重剣を弾く音。

アガット「くっ！」

アグニージャ「その程度の剣で、このウロコを貫けるとでも思ったか！」

ガッシュ「はあっ！」

ガキン！　とガッシュの斧を弾く音。

ガッシュ「なに!?」

アグニージャ「おお、カユいカユい。では、今度はこちらから行くぞ。ふん！」

ぶぅん！　と腕を振るうアグニージャ。

アガット「ぐあっ！」

ガッシュ「ぐっ！」

アイシャ「ガッシュ！」

ティータ「アガットさん！」

エステル「このままじゃ、みんなやられちゃうわ！」

ヨシュア「どうすれば……」

すちゃ、と一歩前に出る足音。

ナレ「アドルとダンが、一歩前に出た」

エステル「え……」

ダン「では、行くよ、アドル君！」

アドル「はい、ダンさん！」

駆け出す足音。

アグニージャ「ちょこざいな。２人がかりで来たところで、蹴散らしてくれる！」

ダン「烈波無双撃！」

ウロコに弾かれる音。

アグニージャ「効かぬ！」
ダン「今だ、アドル君！」
アグニージャ「なにっ!?」
アドル「はあーーーーっ！」

ずばっ、と斬りつける音。

アグニージャ「ぐあっ！」
ヨシュア「うまい！　ダンさんが作ったスキを活かして、アドルさんがうろこのない顔面へきりつけるとは！」
エステル「なるほど、ああやればいいのね。アイシャ！」
アイシャ「オーケー！」
アグニージャ「ぐ、ぐぬぬ……！」

駆け出す足音。

エステル・アイシャ「はぁーーーっ！」
アイシャ「スプレッドライン！」
エステル「真・桜花無双撃！」

矢が刺さる音と、打撃系の音。

アグニージャ「ぐおっ！」
エステル「どんなもんよ！」
ダン「おお！　さすがはカシウスさんの娘だ」
アグニージャ「ぐあああ！　許さぬ……許さぬぞ！」
エリカ「ティータ、チャージはまだなの!?」
ティータ「あと、もうちょっと……！」
ダン「いけない、気づかれた！」
アグニージャ「そこかぁ！」
オリビエ「スナイプショット！」

パンパン！　と銃弾の音。

アグニージャ「ぐあっ！」
ティータ「オリビエさん！」
ヨシュア「やっぱり戻ってきた……」
オリビエ「さぁ、いまだティータ君！」
ティータ「は、はい！　照準よし、エネルギーチャージよし……お母さん！」
エリカ「ラッセルファミリー砲・発射！」

どかーんと波動砲みたいな音。

アグニージャ「ぐあああああ……そんな、そんな技で負けるとはあああああああああっ！」

爆発音。

エステル「やったぁ！」
アイシャ「今の技は、いったい……」
エリカ「私たち家族の愛の力を集結した最終奥義、『ラッセルファミリー砲』よ！」
アガット「いつの間にそんな技作りやがった？」
エリカ「家族じゃないあんたなんか、仲間に入れてあげなーい！　ベロベロベー！」
アガット「入りたくねえよ、そんな恥ずかしい技！」
オリビエ「やれやれ、これで一件落着か」
ガッシュ「……いや、そうでもないらしい」
エステル「えっ？」
ヨシュア「敵を倒したのに、元の世界に戻る気配がない。確かにおかしいですね……」
ジョー「くくくく……よくぞここまでたどり着いた」
アドル「誰だ!?」

コツ、コツと足音をバックに。

ジョー「お前達は、我が手のひらの上で踊っていたにすぎん。そう……アドル、エステル。お前達の運命、我が手中にあるも同然……」
エステル「あなたは……一体誰なの!?」

足音止まる。

ジョー「教えてやろう。我が名はジョー！　ギャラクシー・ヴァン・ジョーだ！」

じゃーん、と派手なSE。
この部分だけ、役から外れて。

アドル「……銀河さん？」
エステル「銀河さんですよね？」
ヨシュア「あの、そのネーミングセンスはちょっと……」
オリビエ「え、そう？　俺結構好きだけどなー」
アイシャ「いや、ないです、普通に」

ジョー　「なんなの！　人がせっかくかっこよく登場したのに、なんなのよ、あんたたちのその態度は！」

エリカ　「まあまあ、落ち着いてください銀河さん」

ジョー　「銀河さんじゃなくて、ヴァン・ジョー！　だいたい、人を毎回毎回悪役にしたてあげたあげく、暗闇の中でずっと待たせやがって！　そのくせあっさり倒してハッピーエンドなんて！」

アドル　「いや、そう言われても……台本がそうなってるわけで」

ジョー　「そう言って皆はさ、ずーっと日の当たる場所でやっててさ！　ずるい！　もー許せん！　だから俺がみんなをこの世界に呼んだんだ！」

一同　「えっ？」

ここから役に戻って。

アイシャ　「ちょ、ちょっと待って⁉　そんな理由で、私たちをこの世界に呼んだの⁉」

アガット　「完全にとばっちりじゃねーか！」

ジョー　「うるさーい！　とばっちりだろうがなんだろうが、俺が決めたからそうしたの！」

アドル　「子供じゃないんだから……」

ジョー　「はっ！　じゃあいいよ、俺の実力を見せてやるから！」

突然、ナレーション口調で。

ジョー　「アドルは、突如としてエステルたちを裏切った」

アドル　「えっ⁉　か、身体が勝手に……！」

エステル　「ア、アドルさん？」

ジョー　「アドルは、エステルに向かって剣を振るった」

ぶん、と剣を振るう音。

エステル　「きゃっ⁉」

アドル　「避けて、避けてくれ！」

ぶんぶん、と剣を振るう音。エステル、棒で剣を受け止める。

エステル　「アドルさん……！」

アドル　「身体の自由が、きかないんだ……！」

ジョー　「フフフフ……どうかね、私の力は？　ナレーション口調で読むことで、世界のあらゆる摂理をねじ曲げる！　この力には誰も逆らえまい」

ヨシュア　「アドルさん、すみません！　やあっ！」

ジョー　「ヨシュアの剣は、アドルによってはじかれた」

キン！　とヨシュアの剣を弾く音。

ヨシュア　「ああっ！」

ジョー　「ムダだと言っただろう」

ナレーション口調で。

ジョー　「アドルは、ヨシュアたちを次々となぎ倒していった」

アドル　「やめろ……！」

ぶんぶん、と剣を振るう音。

※やられセリフは、タイムラグなく立て続けにやっつけたことにして、まとめて出しちゃう感じで。

ヨシュア　「うあっ！」

アガット　「ぐあっ！」

アイシャ　「きゃあ！」

ガッシュ　「ぐっ！」

ティータ　「ああっ！」

オリビエ　「ぐあっ！」

ダン　「ぐうっ！」

エリカ　「きゃっ！」

全員が倒れる音。

エステル　「ヨシュア！　みんな！」

ジョー　「フフフフ……あっけないものだな」

エステル　「許さない！　絶対許さないんだから！」

ジョー　「減らず口もそこまでだ。では、最後の仕上げを……」

ナレーション口調で。

ジョー　「アドルは、エステルにトドメを刺した」

エステル　「ッ⁉」

カチカチ、と剣がなる音。アドル、必死で剣を自分の力で留

めている。

アドル　「く……ぐぅ……！」

エステル　「アドルさん！」

ジョー　「自らの意志で、剣を止めた⁉　我が力に逆らえるというのか⁉」

アドル　「ジョー……思い出してくれ……！」

ジョー　「なにを……」

アドル　「僕の冒険は、いつもあなたと共にあった……あなたのナレーションと共に……！　僕たちは、共に戦ってきた、仲間じゃないか……！」

ジョー　「な、なか、ま……」

アドル　「口べたな僕を……いつも支えてくれて……。あなたがいなかったら、僕は世界を救うことなど出来なかった！」

ジョー　「アドル……」

アドル　「思い出してくれ……あなたの中に眠る、良き心を！」

ピカーッ！　と光輝く感じのSE。

エステル　「剣が、光ってる……！」

ジョー　「この輝きは……！」

アドル　「ドラゴンスレイヤー！！」

ジョー　「まさか……！　この世界のドラゴンスレイヤーは、もう存在しないはず！」

アドル　「ドラゴンスレイヤーは、ただの剣ではない」

エステル　「集まった戦士たちの希望、それがドラゴンスレイヤーの、真の姿なのよ！」

かちゃり、と剣を握る音。

ジョー　「やめろ……やめてくれ！」

アドル　「エステル」

エステル　「アドルさん」

2人　「はあーーーーーーーーーっ！」

ぶん！　と剣を振り下ろす音。

ジョー　「うわあーーーーーーーーっ！」

光が広がっていく感じのSE音。

ジョー　「う、ぅん……」

エステル　「気がついたわ！　よかったー」

ジョー　「私は……そうか、アドルに切られて、気を失っていたのか」

アイシャ　「それにしても、斬りつけられたのに無傷とは、ドラゴンスレイヤーってどんな剣よ」

ヨシュア　「多分、ジョーさんの、悪しき心の部分のみを切ったんだと思う」

ジョー　「私の中の弱い心が、ザナドゥの力と共鳴し、このような事態を引き起こしてしまったようだ……すまない」

アドル　「もういいんです」

ジョー　「アドル……ありがとう。これからも私は、君と共にいよう。君の冒険が続く限り」

アドル　「はい」

エステル　「それじゃ、私たちを元の世界に戻してくれる?」

ジョー　「もちろんだ」

エステル　「やったぁ！」

アガット　「やれやれ、一件落着ってところだな」

ガッシュ　「これでようやく、元の世界に戻れる」

オリビエ　「僕を待つ美女たちが大勢いる、元の世界がやはり恋しいねぇ」

ティータ　「アドルさんとジョーさん、仲直り出来てよかったです」

エリカ　「……いや、そもそもアイツがいなかったら、私たちこの世界に呼ばれなくて、フツーに暮らせてたんじゃない?」

ダン　「はっはっは！　相変わらずエリカさんは辛辣だなぁ」

エステル　「それじゃあ、アドルさん、アイシャ、さようなら」

ヨシュア　「みなさんお元気で。もう、会うことはないと思いますけど」

アイシャ　「分からないわよ～?　また、どっかの誰かが、こんなのイヤだー！　って駄々をこねるかも」

ティータ　「くすくす……わたし、楽しかったです、だからまた会えるなら、呼ばれてもいいかも」

ガッシュ　「名残は尽きないが……元気でな、おチビさん」

ティータ　「あ、はい。ガッシュさんもお元気で」

ガッシュM　「も、も、も、持ち帰りたいぜ」

エリカ　「シャーッ！　新たなる敵発見！」

ダン　「エリカさん、どうどう」

アガット　「あばよ」

オリビエ　「ごきげんよう、諸君！」

アドル「さようなら、エステル、みなさん」

ナレ「アドルは優しく微笑み、手を振った。その姿が、光に包まれる。それを見るエステルたちも、やがて光に包まれ――戦士たちは自らの世界へと帰っていった。アドル＝クリスティンと、エステル＝ブライトの物語は、いったんここで終わりを告げる。彼と彼女の新しい物語は……また、別の機会に」

■スタッフロール

ナレ「ドラマCD、イース＆空の軌跡バーサスヴァン・ジョー」

ナレ「出演」

草尾ナレ「アドル・クリスティン：草尾毅」

神田ナレ「エステル・ブライト：神田朱未」

斎賀ナレ「ヨシュア・ブライト：斎賀みつき」

三上ナレ「アイシャ＝サリ＝エドナス：三上枝織」

今野ナレ「ティータ・ラッセル：今野宏美」

雪野ナレ「エリカ・ラッセル：雪野五月」

草尾ナレ「ダン・ラッセル：草尾毅」

近藤ナレ「アガット・クロスナー：近藤孝行」

子安ナレ「オリビエ・レンハイム：子安武人」

佐藤ナレ「ガッシュ：佐藤拓也」

銀河ナレ「ダーム：銀河万丈」

銀河ナレ「ガルバラン：銀河万丈」

銀河ナレ「アグニージャ：銀河万丈」

銀河ナレ「ギャラクシー・ヴァン・ジョー：銀河万丈」

銀河ナレ「ナレーション：銀河万丈」

銀河さん以外全員「銀河さん、多すぎ～～～～～～～」

おわり

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

今月のプレゼントはこちら!!



① 1名様

①『東京ザナドゥ』サイン色紙セット
雪村京香役 たかはし智秋＆九重永遠役 野中藍

『東京ザナドゥ』発売記念プレゼント第５弾、同じ「お姉さんタイプ」でも貴方はどちらがお好み!?



② 1名様

②魔法少女まじかるアリサクリアファイル

あの魔法少女がプレゼントに帰ってきた！ ファン垂涎のレアアイテム、これが最後のチャンスかも!?

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.61プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白い→
　つまらない→
　（記事一覧から1つずつ）
3：①
　②
　（はい・いいえ／作品名）
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

1：イースⅧ 最新情報
2：みんな集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 閃の軌跡
4：ファルコムヒロインが好き！
5：エステル＆ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ
6：ファルコムニュース

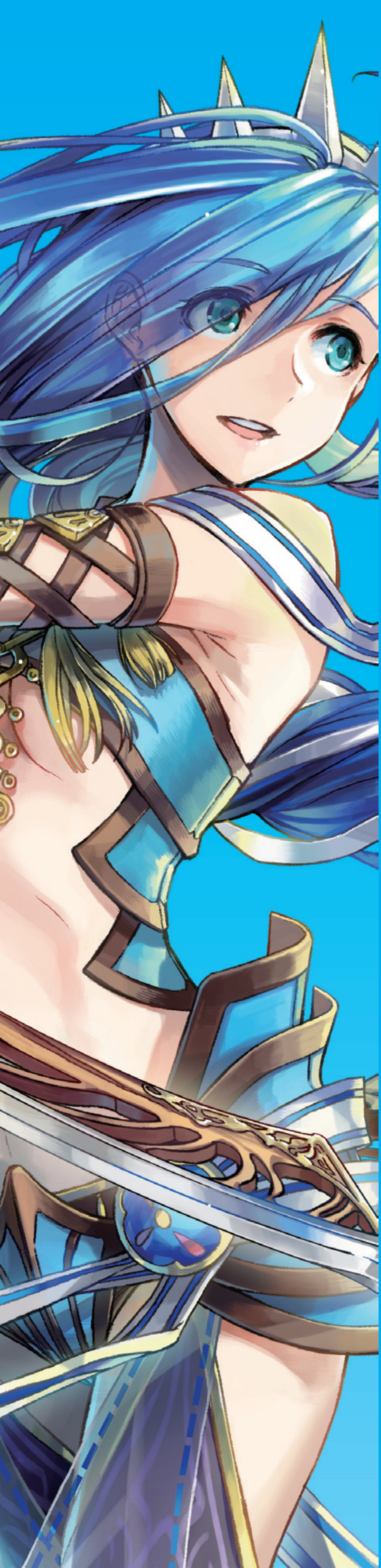
アンケート

①一番よく使うゲームハードは何ですか？
②『軌跡』シリーズの中で一番好きな作品は何ですか？

特設サイトからも応募ができます！
http://www.field-y.co.jp/root/index.php/falmagap

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 3月25日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.61

発行人　田中一寿

発行協力　日本ファルコム株式会社

編集　小渕智幸
大場恵美子

デザイン・DTP　さとうだいち／石橋青大／金田悠未

表紙ロゴデザイン　荻窪裕司（ビーニーズ）

発行　株式会社フィールドワイ
〒 101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/

制作・販売協力　シナノ印刷株式会社